

敬愛大学 宮城ボランティア 2019 活動報告書

～ いま、ここ、じぶん ～



未来へ、君へ。

地域連携センター

(表紙)

宮城県南三陸町で、今年お世話になった民宿下道荘。「一期一縁」と記された額は、この民宿の玄関ホールに設置されています。下道荘も東日本大震災の津波で全壊されたそうですが、翌2012年には高台に再建。穏やかな志津川湾の見下ろすロケーションと美味しい料理、明るく気さくな従業員の皆様に迎えていただきました。「一期一縁」、私たちも大切にしていきたい言葉です。

表紙の上下2色の帯は、本学のスクールカラーである「敬愛レッド」「敬愛ブルー」です。



バス車窓から見える現実



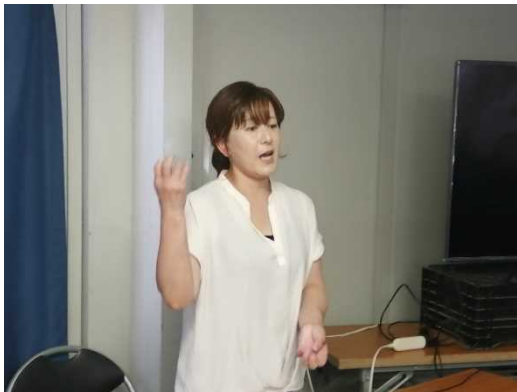
除染土が野積みになっている原発周辺



双葉町のコンビニ(宮ボラ2018)は



板で覆われていた(宮ボラ2019)



雄勝弁でお話いただいた佐藤麻紀さん



大川小学校でお話いただいた鈴木典行さん



震災前の大川小学校



今年の大川小学校



南三陸町防災庁舎で献花



南三陸町の案内してくださった佐藤良夫さん



日和山でお話いただいた長沼俊幸さん



関上の記憶でお話いただいた丹野祐子さん



夕暮れまで熱心にお話を拝聴する学生たち



慰霊碑に手のぬくもりを移しながら祈りを



宮城、千葉、福岡をつなぐ学びあいの時間



価値ある時間を共有したディスカッション

敬愛大学 宮城ボランティア 2019 活動報告書

～ いま、ここ、じぶん ～

Page 1	巻頭言
2	訪問地、行程
4	総括
6	参加学生・卒業生のレポート
44	3大学合同研修・交流プログラム
48	参加者名簿
	編集後記

巻頭言

今年の宮城ボランティアは、行程最終日の朝に台風15号が千葉市に上陸し、千葉県内に想定外の被害をもたらすという、忘れられないものになりました。これまで東北の被災地支援のありかたを宮城ボランティアで学んできた私たちが、支援する側から支援を受ける被災地域になるとは全く予期していませんでした。さらに記録的な大雨を伴った台風19号が各地に甚大な被害をもたらすことも重なり、改めて自然災害の怖ろしさを感じます。

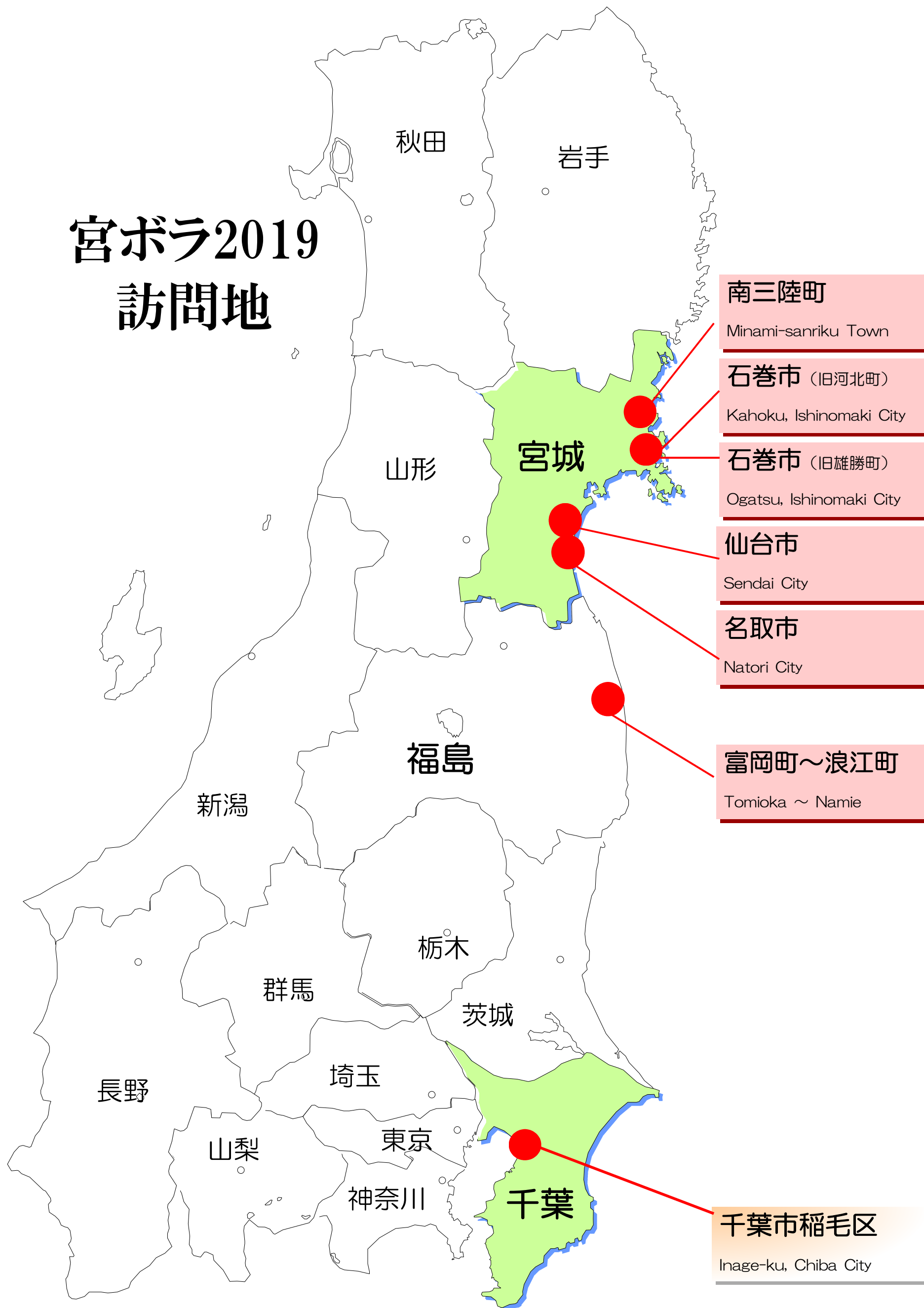
出発前に参加者には、「三現主義」についてお話ししました。すなわち物事の問題解決の姿勢として、「現場に出向くこと」「現物に直接触れること」「現実をとらえること」を重視する考え方のことです。みなさんが今年の宮城ボランティアで見聞してきたものを、こういう視点から一人ひとりがより深めてほしいと思います。

本学が毎年夏季期間に実施している「宮城ボランティア」は9回目を迎え、今年は学生37名、卒業生1名が参加してくれました。本学の活動記録は「東北大学附属図書館震災ライブラリー」にも所蔵され、震災で得た教訓を後世にしっかりと引き継いでいく資料の一つにもなっています。

本報告書の発行にあたり、第1回からお力添えをいただいている尚絅学院大学の皆様をはじめ、多くの協力者の方々に改めて感謝申し上げます。

学長 三幣 利夫

宮ボラ2019 訪問地



宮ボラ2019の行程

【第1日目】9月7日(土)

- 6:45 稲毛駅(快活クラブ稲毛店前) 集合
- 7:00 稲毛駅前を出発し、千葉北ICから東関東道、圏央道、常磐道、三陸道を経て北上。
途中、福島県富岡町(常磐富岡IC)～浪江町(浪江IC)間は国道6号線を北上、車窓から「帰還困難区域」の様子を車窓から見学。
現地集合の学生1名と道の駅「上品の郷」(石巻市)で合流。
- 14:10 雄勝ローズファクトリーガーデン 着
語り部の佐藤麻紀さんからお話を伺う。
- 16:00 石巻市立大川小学校跡 着
語り部の鈴木典行さん(大川伝承の会)からお話を伺う。
- 18:30 民宿下道荘 着
-

【第2日目】9月8日(日)

- 9:00 下道荘 発
語り部の佐藤良夫さん(南三陸町旭が丘区顧問)に案内していただき、南三陸町内を現地踏査。
北の恋人岬、防災対策庁舎、高野会館、戸倉小学校跡、戸倉中学校を訪問。
- 11:00 南三陸さんさん商店街着。献花・記念写真後、自由行動。
- 12:00 南三陸町「カフェ・こもんず」で弁当積み込み、車中食。三陸道を経て南下。
- 13:15 仙台中野5丁目津波避難タワー(車窓から見学)
- 13:45 震災遺構・仙台市立荒浜小学校 着。西南学院大学と合流し、一緒に見学。
- 15:30 名取市震災メモリアル公園 着。
西南学院大学と合同で2グループに分かれ、閑上地区を現地踏査。語り部の長沼俊幸さん(閑上中央自治会会長)、丹野祐子さん(閑上中学校遺族会会長)からお話を伺う。
- 18:00 閑上プラザ(市立閑上小中学校内) 着。
西南学院大学と一緒に、閑上中学校慰霊碑を訪問。
- 18:30 ホテルルートイン名取 着
-

【第3日目】9月9日(月)

- 9:30 ホテル 発
台風による荒天のため、「千年希望の丘」訪問は断念。(閑上プラザ訪問は前日に済ませた)
- 10:15 尚綱学院大学 着
- 10:30 尚綱学院大学、西南学院大学との合同ボランティア学習会
- 13:30 同所 発
車内では一人ひとりが、感想や自分自身の得た学びを発表しあった。
台風15号の影響で千葉県内に高速道路の通行止めがあったため、「道の駅発酵の里こうざき」、
「千葉ニュータウン中央駅」、「敬愛大学」、「JR稲毛駅」、「京成稲毛駅」で適宜降車させた。
- 21:00 敬愛大学 着

「自分ごと」にすることの意味

団長 地域連携センター室長 藤森孝幸

「敬愛大学宮城ボランティア(宮ボラ)」は、通算9回目のプログラムを無事終了することができた。震災から8年半、学生たちの大半は震災当時小学生だったことになる。私が担当するようになって4年目になるが、担当1年目は希望者全員を参加させても20名に満たない人数だった。それが今年の事業説明には2日間で70名も集まったことには、驚かずにはいられない。震災当時に小中学生だった学生たちは、なにを「宮ボラ」に期待しているのだろう。そう思いながらも、多くの学生が参加したいと手を挙げてくれたことには、素直に感謝の気持ちを感じていた。バスや宿舍の状況から、学生37名(うち初参加32名)と卒業生1名を参加させることとし、9月9日に稲毛を出発した。



今年の宮城ボランティアをスタートさせるにあたり、私は「いま、ここ、じぶん」をテーマとした。相田みつを氏の揮毫でご存じの方も多かろう。何度も足を運んだことがある者も、初めて「被災地」と呼ばれる地に赴く者も、誰もが「今の被災地を受けとめ、その場所その場所で何を感じられるかを考え、そして自分なら



どうすると問いかける」人であってほしいと願ってのことだ。特に今年は参加者の大半が初めての参加である。ということは見るもの、聞くことの全てで「昨年との比較」はできない。予備知識なく五感で感じてくれることを期待した。

プログラム設計においても、多くの方にお力添えをいただいた。例えば当初、大川小学校は私が案内することを考えていた。しかし昨年も参加した学生から「ぜひ語り部の方に説明していただくべきだ」と言ってもらえた

ことで、よりプログラムの充実を図ることができた。

「いま、ここ、じぶん」というテーマは、現地で語り部の方々をはじめとする多くの方々と会いながら、「自分ごとにする」という言い方に大きく進化していった。震災から8年余り、風化は進んでいる。多くの学生たちが綴っているとおり、報道は3月11日前後にしかされない。被災地で積み重ねられた辛く大変な体験は、残念ながら私たちの日常には必ずしも直結はしていない。なぜなら「他人ごと」だから。自分がした経験ではないから、「自分ごと」にできていないから、「貴重な話ですねえ」と言いつつも風化させてしまう。どの語り部の方からも「自分ごと」にすることの大切さが語られた。ある語り部の方からは、「直接被災をしていないあなたでも、語り部になれる」との言葉があった。この3日間で見聞きしたものや感じたことを伝えるのは、誰にでもできるからだ。この報告書には、参加者全員が一人1ページずつ自分の思いを書き綴っている。この1ページこそが、書いた学生一人ひとりの「語り部活動」になるのだ。またInstagram、ツイッター、フェイスブック等で発信すること、来年も「宮ボラ」に参加すること、誰かにプレゼントを贈ったり大学祭等でなにかを販売したりするときに、宮城や福島の商品を選ぶこと、友人や家族とのドライブで今回の訪問地を再訪する等々、語り継ぐ方法は無限にあるはずだ。その一つひとつの行為が、「他人ごとから自分ごとへの進化」になると言えるだろう。

そう考えながら学生たちと宮城を移動していたとき、台風15号が千葉県に上陸して県内外各所に甚大な被害をもたらした。特に長引く停電に苦勞した学生たちも、少なくなかったようである。台風と地震や津波の備えは、必ずしも同じでいいというわけではない。しかし千葉に戻るバスの中で、参加者一人ひとりはこの台風による被災を「自分ごと」として捉えていた。だから不安を感じつつも、どんな行動が必要なのかを考え、冷静に行動することができたと言える。中には当日中に自宅に帰ることができなかった者もいた。中には電話の向こうで不安を訴える家族を励ましている者もいた。その姿を見て、私は学生たちを心強く思うことができた。

相田みつを氏は「いま、ここ、じぶん」を別の作品でも紹介している。

いま ここ じぶん

いま ここ じぶん

それをどう充実させて生きるか

あるいはむなしく生きるか

それをきめるのは いま ここの じぶん

みつを氏の言葉を引用するなら、「どう充実させて生きるか、あるいはむなしく生きるか」の差は、「縁の積み重ね」で決まると私は考えている。だから支援は「支縁」に進化するし、一期一会は「一期一縁」なのだ。今回の経験を通じて、参加した学生たち、また本報告書をお読みいただいた多くの学生・教職員が、未だゴールの見えない東日本大震災の被災地の現状に思いをはせ、また昨今続いている様々な自然災害への備えを考え直しながら、今回のテーマの「いま、ここ、じぶん」の意味を考え続け、「自分ごと」にして実践していくことを期待したい。

結びに、多くのご縁に改めて感謝と敬意を表したい。

今回の企画実現にあたり、特に記して感謝申し上げます。

- ◆佐々木真理様、佐々木未央様（尚絅学院大学連携交流課）
- ◆山口由美子様、加藤寿人様（西南学院大学キリスト教活動支援課）
- ◆佐藤麻紀様
- ◆徳水博志様、徳水利枝様（一般社団法人雄勝花物語）
- ◆鈴木典行様（大川伝承の会共同代表）
- ◆菅原由輝様（民宿下道荘）
- ◆佐藤良夫様（南三陸町北の恋人岬プロジェクト実行委員長、旭ヶ丘行政区顧問）
- ◆川村敬太様（震災遺構・仙台市立荒浜小学校）
- ◆長沼俊幸様（閑上中央自治会会長、元・名取市愛島東部団地仮設住宅自治会役員）
- ◆丹野祐子様（閑上中学校遺族会会長）
- ◆あすか交通株式会社
- ◆ルートインジャパン株式会社
- ◆公益社団法人 3.11 みらいサポート

宮城ボランティアに参加して

経済学部1年 五十嵐優希

東日本大震災が発生した当時は、小学4年生だった。地震が起きた時は小学校からの帰宅途中で、あと少しで家に着く上り坂で感じた大きな揺れに、とても恐怖を感じたことを今でも覚えている。今回は実際に宮城の被災地に行き、震災発生当時の状況や語り部の方々の話を伺い、今後の備えや自分が出来ることを学びたいと思い、参加を申し込んだ。

佐藤麻紀さんから、「貴重な話ではない」と言われました。悲痛な話や苦しい話を実際に聞き、自分もその場にいるという意識で聞いていたので、自然に涙も出るほどとても印象に残っている。またその後に訪れた石巻市立大川小学校では、津波により小学6年の娘さんを亡くされた鈴木典行さんに話を伺った。学習環境の充実した学校だったが、まさかここには津波は来ないと思っていた先生方は裏山に避難させることが出来ず、74名の児童が亡くなったという。普段から避難訓練を重ね、いざという時にはすぐに裏山に逃げるという迅速な対応をとっていたら、多くの児童の命を救うことできたろうことも分かった。



南三陸町の防災対策庁舎の話は、佐藤良夫さんに伺った。津波が迫っていることを防災庁舎の2階の放送室から高台へ避難するよう、女性職員と男性職員が繰り返し呼び掛けていたそう。そこに大津波が襲来。職員の中には、屋上の無線アンテナにしがみついて助かった方もいたそう。今は写真の通り、骨組みだけが残っている。

様々なお話を伺い、また現場を拝見し、お互いが助け合って生きていることへの「ありがたさ」を、強く意識できるようになったと感じる。今回の機会を通じて、家族や友人に伝えたり、自分がすぐに出来ることがないかを考えたりしていきたい。

〔私の一枚〕

3日目に尚絅学院大学(宮城)、西南学院大学(福岡)、敬愛大学(千葉)の3大学の学生たちが集まり、合同の学習会の最後に撮った写真です。みんなでお互いの考えや経験を共有することで、意見を交換しあうことができた。

今後にかかしていきたいと考えている。



宮城ボランティアに参加して

経済学部 1年 永井郁人

今回の宮城ボランティアに参加して、被害の大きかった東北地方を訪れた。行く前は「8年も経っているし、復興しているだろう」と思っていたが、いざ実際に訪れてみると福島には未だ帰還困難区域が広がっていたし、宮城もまだ元通りになったわけでないことに驚きを隠せなかった。

特に印象に残ったのは、語り部の鈴木典行さんの話だった。鈴木さんは津波で当時小学6年生のお嬢さんを亡くされており、当時の状況と心境を語ってくれた。大川小学校は目の前に裏山があり、津波が来る前にそこに逃げるべきだったのだが、当時の職員たちは「ここに津波はこないだろう」と安心してしまっていたらしい。上級生の児童が先生に対して高台に逃げようと言っても聞いてもらえず、その結果全校児童108名のうち74名が犠牲になった。津波は学校だけでなく周辺の街も全て流し去ってしまい、一瞬で当たり前の日常を全て壊してしまった。



今回の活動に参加して学んだことは、いつもある平穏な日常は当たり前のように永遠に続くとは限らず、たった一つの災害で簡単に崩れてしまうものだということだ。名取市閑上地区には、震災の前は地域の住民で集まる一つのコミュニティがあったが、震災後の仮設住宅入居でコミュニティの作り直しを経験した。にもかかわらず、後にできた復興公営住宅に移り住むことで更にコミュニティ再生を余儀なくされた。中には住みながら体調を崩してしまう人も少なくなかったということだ。

もう一つ学んだことは、地震が来たら「絶対大丈夫」と思わず、津波が来る前に必ず逃げることを、家族や友だちが心配でも生きていればまた会えるということを信じることを、自分が命を落とせば意味がないこと、家族よりも長生きすること、それらどれもが大切だと学べた。

このボランティアを機に自分の中での防災意識を改めて見直す機会となった。8年前のあの震災の出来事を記憶に焼き付け、多くの人に災害の恐ろしさを改めてもう一度知ってもらいたい。

【私の一枚】

9月8日に訪問した「閑上の記憶」で撮りました。目の前に広がる海がとても綺麗で、波の音も静かでした。この閑上の海は市場や祭礼等の行事で盛り上がっていたそうですが、震災の影響で活気が失われてしまったそうです。丹野さんの話をお聞きし、日常はいつまでも続くわけではないということ、親よりも先に死ぬことは悲しいことなのだと改めて思いました。



宮城ボランティアを終えて

経済学部 1年 中村幸太郎

3月11日、その日平凡な生活が一瞬にして終わりを告げた。東日本大震災が起こった時の私は小学4年生で、地震が起きた時は学習塾にいた。当時私が住んでいた鉾路市は震度4の地震だったが、私が初めて体験するとても大きな地震だった。家に帰りテレビを見ると、映し出されていたのは、波に押し流された車の山や家そのものの姿だった。しかし当時の私には、津波がどれだけの脅威なのか理解すらできなかった。

今年大学生になり、震災から8年5か月経った9月7日、初めて宮城を訪れた。私は宮城を訪れる前は「8年も経っているし、復興も終わりが近いのでは」という考えだった。しかしそんな考えは現地を見た瞬間になくなった。

1日目に訪れた雄勝の街。そこでは今も作業をしている重機の数々。そして次に訪れた大川小学校跡。私の中で最も印象に残っている場所だ。津波の被害そのものが残されていた。ガラスが一枚も残っていない変形した窓、原型を残していない体育館の跡。そして語り部の方々による生々しい体験談。初日からとても心が痛くなった。



2日目は南三陸の防災庁舎や戸倉中学校などを回ったが、その中でも一番印象に残ったのは荒浜小学校だ。そこでは津波によって曲がった鉄柵や津波が到達した位置で錆びたロッカーなどが残されていた。夕方は閑上地区で貴重な体験談を拝聴することができた。「閑上の記憶」では、実際に津波に巻き込まれている映像を見、長沼さんからは家ごと流された自宅の屋根に登って助かった体験談を聞いた。

実際に被災地を訪れ、想像だけではわからない、訪れなければいけない場所があると分かった。そして実際に友人に今回のことを話したら、私が最初に思っていたことと変わらない考えだった。やはり実際に訪れていなければ、誰もがこう考えてしまうのだと考えさせられた。

今すぐじゃなくてもいい。生涯のどこかで一度でも被災地を訪れてほしい。

〔私の一枚〕

初日に訪れた大川小学校です。私が選んだこの写真は、大変不謹慎な言い方かもしれないが、最初に見たときには芸術的だと思ってしまった。と同時にここで津波の脅威について痛いほど知ることとなった。

震災の爪痕を直接見ることは、何よりも自然を侮ってはいけないという自己啓発にもつながるだろう。



宮城ボランティアに参加して

経済学部経営学科 2年 猪又唯衣

今年も宮城ボランティアに参加することができた。初参加の学生が多い中、2回目の参加という機会をいただいて、昨年と違う視点で比較しながら見ることができたと思う。

特に関上地区の景色は、1年でこんなにも変わるのかと驚いた。綺麗な街になっていくことで復興が進んでいるのだと思っていたが、被災者の心の復興にはまだまだ問題があるということを知った。仮設住宅がなくなり、復興公営住宅に住めるようになったことが全てよいこととは言えず、7年半仮設住宅に住んでいた方々のコミュニティがなくなり、今は周りに誰が住んでいるのかわからない状態だそうだ。以前は近所の方々と交流して明るかった方が、今は1週間家から出ないという状況がある。また未だ行方不明の方々がいる。その方々を見つけてあげられない限り、本当の復興とは言えないと現地の方々が仰っていた。



津波の恐怖は体験した人にしかわからないが、体験した方々のお話を聞いて備えることはできると思う。

災害にあった場合、どこに逃げるのか、一次避難、二次避難、三次避難の場所はどこなのか、その土地にはどのような特徴があるのかなどを、きちんと知ることが大事だと思う。災害にあった時、正しい判断で避難できるようにしなければいけないと感じた。

そして津波で被災された方々には帰る家や故郷はなく、家族も離れ離れだったり津波で亡くされていたりだ。電気も水も使えず、普通の生活ができなかった。今自分が普通の生活ができて、帰る家もあって、家族

も揃っている。そんな当たり前の状況が、決して当たり前ではなく、幸せに暮らせている日々感謝していると思った。

【私の一枚】

福島県の帰還困難区域で撮った写真である。福島県には、帰りたくても帰れないという状況が今でも続いている町がある。家があるのに帰れない、今まで住んでいた家や故郷で暮らせない。そんな悲しみは、被災した方々でないとわからないだろう。今日一日生きていられたこと、家族や友人がいること、帰る家や故郷があること、そのすべてが奇跡であるということを大切に過ごしていきたい。



宮城ボランティアに参加して

経済学部経営学科 2年 長谷川風沙

2回目の参加となる宮城ボランティア、どのお話もとても心に響いた。

「閑上の記憶」で今年もお話をしてくださった丹野さん。津波で亡くなられた息子さんを想い、今でも少年漫画雑誌を毎週欠かさず買ったり、帰ってきてくれると信じて家の鍵を掛けなかったりと、わが子に対する愛の大きさを思い知った。親というのはこういう生き物なのだと改めて思い知った。閑上日和山近くに整備された震災メモリアル公園には、犠牲になった944名の方のお名前が刻まれた芳名板がある。丹野さんの息子さんの名もそこに刻まれていて、見つけることができた。ここに刻まれている944名の方それぞれに大切な家族がいて、愛する人がいる。今も帰りを待つ人がいるということを忘れてはいけない。



去年と同じ場所に訪れる際は、どこが変わったか、何が変わったかを意識して見た。実際、道が整ったり新しい建物が増えたりと、復興工事が進んでいるという感覚を覚えた。しかし丹野さんの言葉が忘れられない。



「どんなに町が綺麗になっても、それは復興とは言えない。行方が分からない人たちが見つかって、家族のもとに戻ってきて初めて復興したと言える。それが最低限の復興であってほしい」。この言葉を聞いた時、私の考えがいかに浅はかなものだったか思い知った。人の心はどこまでも深い。実際に被災した方の想いは完全には理解することは出来ないのだ。しかしこの想いを理解してはいけなし、体験してほしくないとも佐藤さんはお話をされていた。その話を聞いた時、寂しい

感情を覚えた。その気持ちに寄り添うために、少しでも近づくことはできないかと考えた。答えは分からないけれど、私は私なりにこの言葉を受け止め、向き合いたいと思った。旅行でもなんでも、どんな形でもいいから、何度でも被災地に足を運びたい。

〔私の一枚〕

これは閑上中学校遺族会が建てた慰霊碑で、現在は新設された閑上小中学校の敷地にあります。昨年に引き続き、この慰霊碑に触れることができました。この慰霊碑は冷たくならないように、黒い御影石で出来ています。寒くないように、寂しくないように。そんなところにも親の愛というものを感じます。



初めての宮城ボランティア

経済学部経営学科 3年 鈴木輝久

東日本大震災が起こった当時、私はまだ小学校に通っていた。当時ニュースでしか見たことのなかった私はまだ幼く、実際にどのようなことがあったのかははっきりと理解してはいなかった。しかし今回宮城ボランティアという行事に参加することで、現地の方々から当時何があったのか、どのような状況だったのかを直接聞くことができる機会を得ることができた。今回は、参加して最も印象に残った一日目の話を主に書いていく。

宮城ボランティア当日、宮城に向かうバスの中では震災によって崩れてしまった道路やそこから出た瓦礫を入れている黒い袋(フレコンパック)をいくつも目撃した。同じような袋が沢山山積みになっていたが、中には除染土が入っている袋もあると聞いて、怖さを感じた。そして宮城に到着し、すぐに語り部の佐藤さんの話を聞いた。佐藤さんは「自分に置き換えて聞いてほしい」と話していた。そして自分に置き換えながらお話を聞いていると、自然と涙があふれていた。その後に訪問した石巻市立大川小学校。そこでは鈴木さんの話を聞くこ



とになっていたが、到着してすぐ私は目を疑った。学校の校舎が壁や柱を残してほとんどなくなっていて、体育館への連絡通路はねじれて倒れてしまっていた。そこでは多くの児童が亡くなったという。小学生ながらも津波が来る前に逃げようとしていた生徒たち、しかしその当時の教師たちはそれを許さなかった。そこで高い場所に逃げることであれば一人も被害が出ることはなかっただろう。

今回の宮城ボランティアで一番学んだことはとにかく逃げることに、何かが起こる前にしっかり話し合っておくことが特に大切だということだ。今回ボランティアで学んだことを今後生活していくうえで忘れないようにし今回伺った話を身近な人たちに伝えていくことを今後の目標とし、このレポートを閉じる。

〔私の一枚〕

9月7日に訪問した石巻市立大川小学校の写真です。もともとは大きな建物や家がいくつも立ち並んでいた街だったそうですが、津波によってこの写真のように、ほとんどの建物が流されてしまい、なくなりました。震災前の写真と見比べて、あまりにも景色が違い少し怖いと感じ、今回の宮城ボランティアで一番印象に残っているのでこの写真にしました。



未来につなげる

経済学部経済学科 3年 伊藤麻衣

東日本大震災から8年。私はすっかり地震や津波の恐ろしさを忘れていた。忘れてしまっていたからこそ、今回の宮城ボランティアを通して多くのことを知り、学び、「絶対忘れてはいけない」と心に強く思った。

3日間のなかで、語り部の方々から自分が経験したことや現在の被災地のことなど、沢山の話を聞くことができた。どれも私にとって悲しい話でもあり、貴重な話でもあり、聞いていて涙してしまう話であった。特に1日目に伺った語り部の佐藤さんの話が印象に残っていて、今でも鮮明に覚えている。津波の映像を見せる前に佐藤さんは私たちにこのようなことを言った。「今から見る映像は過去の映像じゃなくて、未来の映像として見てほしい」。この言葉で私は少し怖くなった。それと同時に、津波に対する私の考えの甘さを実感した。また、佐藤さんは私たちに「津波てんでんこ」という言葉を教えてくれた。バラバラに逃げても後で生きて会おう、生きていればまた会える、といった意味だ。生きて会うためにはしっかりと地震や津波への対策をしなければならないと私は思った。



ここまで津波はこないだろう、大きい津波なんてくるはずがない。根拠のない思い込みで多くの方々があの日、津波で亡くなられた。このような災害を繰り返さないためにも、私たちになにができるか。また私たちにできる最大の支援とはなにか。たくさん考えさせられる3日間だった。

自然災害は未然に防ぐことはできないけれど、対策はいくらでもできると思う。私に今すぐできることは、この宮城ボランティアで学んできたことを家族や友人に伝えることだと思った。私が学んできた大切なことを、次へ次へと次世代につなげていきたい。いつかまたきてしまうかもしれない自然災害に備えて。

〔私の一枚〕

これは大川小学校を、目の前にある山から撮った写真です。津波がくる前、学校の周りには家がたくさんありました。もしもあの時、みんなでここまで登ることができていたら・・・、突然に川から波が押し寄せてきたその瞬間の恐怖はどれだけのものだったのか・・・、そう考えると胸が苦しくなりました。



対策・準備・これから

経済学部経済学科 3年 江澤健太

東日本大震災から8年になりますが、震災の状況は新聞やニュースでの断片的な情報しか知りませんでした。しかし実際のビデオを見せていただき、荒波が押し寄せあらゆるものが流れているのを見て、驚きを隠せませんでした。

佐藤麻紀さんの話では、当時突発的に起きた地震は自らの体を支えることさえも難しい程で、思考停止してしまうほどの大きさだったそうです。学校の校庭に集合しているこどもたちを見つけ、「山の方へ逃がせ」と怒鳴りやつのことで避難が始まるほど、混乱していることが伝わりました。またこどもたちが親と一緒にいないと不安に感じていたこと、大切な荷物を取りに帰る人たちと交錯し、いかに避難が困難であったかも知りました。また鈴木典行さんの話では、小学生が寒い中、校舎の外で待機させられ、体調を崩したり泣き叫んだりする子もいたそうですが、学校にいれば安心だと判断が下された結果、多くの命が失われたことに哀しみを覚えました。山へ逃げていれば助かっていた、失われた命は後悔しても戻らないのです。



丹野さんの話では、「閉上にはそれまで大きな地震があっても津波が来ていないから大丈夫」、と過信していたそうです。だから実際に津波が押し寄せ、何もかもが流されるほどの津波により多くの人を失ったと聞き、過信しないことや備えることが大切であること、何かを守れても命を失ってしまったら何も残せないということを学びました。また長沼さんからは、正確な情報があればどう動くべきかを判断する材料になると聞き、正確な情報やそれらを共有することの大切さを学びました。

語り部の方々が共通して話していたのが、「命に代えられるものはない」ということ。とにかく自分の命を優先して、災害はここには来ないだろうという過信を捨てることを肝に銘じるべきだと思いました。自分が大切な人を失った時にどうすべきか、等を改めて考え直すきっかけになりました。今回得たものを発信していき、共有していきたいと思います。

〔私の一枚〕

日和山から見た、名取市震災メモリアル公園の写真です。震災当時、写真中央の石塔の高さまで荒波が押し寄せたそうです。起きるはずがないと思っていることでも、実際には起こりうるということを思い知らされました。「ありえない」と過信することはよくないことだと考えるきっかけになりました。



宮城ボランティアに参加して

経済学部経済学科 3年 二瓶幸

今回初めて宮城ボランティアに参加して、私は「知っているようで何も知らなかったのだ」と思い知らされた。仙台にはプライベートで数回来たことはあったが、被災された地域には行ったことがなかったので、貸切バスで実際に被災地を巡り、語り部さんの話を聞き、自分の目で現実を目の当たりにすると、本当に自分は何も知らなかったのだと思った。

語り部の皆さんは、当時のことを時には涙ながらに話してくださった。話を聞かせていただきながら、私は「もしも逆の立場だったなら」と考えてしまい、正直怖くなった。自分にとって大切な人が目の前で一瞬にして居なくなってしまう恐怖が、他人事に思うことができない。「あの時もっと早く山に逃げていれば」という言葉は、語り部さんが言っていたように、今になって考えても仕方がないのかもしれない。しかしこれまでの災害に対しての軽い認識が何人もの命に関わるものであると考えると、これからは認識を改めなければいけないと思った。考えすぎだと言われるかもしれないが、備えすぎて損をすることはないと思う。そしてそれは自分の身を守るだけではなく、より多くの人と共有することができればより多くの人達を救えることに繋がるはずだと、私は考える。



となのか、思わなくてもいいことだったのかはわからない。でもこうして感じて初めて気付けたこともあるので、私はこの気持ちを忘れることなく大切にしたいと思った。



〔私の一枚〕

この写真は津波の被害にあった地域に、今も遺構として残されている「荒浜小学校」。震災の際、津波の流れに逆らわない向きに校舎が建っていたことから、この校舎は流されることがなく、児童や教員、この校舎へと逃げてきた人たちは屋上に避難することで難を免れることができたそう。



被災地から学んだこと

経済学部経済学科 3年 丸野美紅

宮城ボランティアに初めて参加して一番印象に残ったのが、1日目の佐藤麻紀さんのお話だった。内容は地震発生から津波が来た後までの行動で、当時のことを鬼気迫る様子で話す様子に、私自身がその場にいるように錯覚し、まるで実体験をしたかのような感覚だった。中でも、「びいちゃん(おばあちゃん)なあ、…ダメだった」「なんでダメって言うの！」ここのやり取りは本当に胸がいっぱいになった。「ダメだった」の一言ですべて悟ることができるのは残酷で受け入れ難くて、とても苦しくなり涙が溢れた。聞き終わってから、これから3日間辛い体験をした方のお話を聞くとすると憂鬱になりそうだったが、実際はまったくそんなことはなかった。どの語り部さんも被災してから学んだこと、次に活かしてほしいことを私たちに語りかけてくれた。



大川小学校はいまだに建物がそのままの状態と保存されており、津波がどのようにして学校を破壊し、子どもたちを飲み込んでいったのかという説明に用いられた。ここでは、避難の仕方を見直すことが重要だと思った。もう二度と、避難指示を誤り命が失われることがないようにしなくてはならない。人災によって失われる命があるのは悲しいことだと思った。

今回語り部の皆さんから話を聞いて、3月11日という日は、8年経った今でも、またこれから先何年経っても、絶対に忘れてはならない日だと改めて実感できた。放射線の数値が高く未だに帰還困難な地域、住人の方のアフターケアなど問題はまだ沢山あるが、現状を知ることによって他人事ではないことを実感させられた。また復興を推し進めるためには助け合いが必要で、私たちにもできることは何か考えさせられることが多かった。今回宮ボラに参加することで災害やその後について学べたので、参加しなかった人も是非一度参加してほしいと思う。命の尊さ、当たり前大切に気づかされる3日間になったのでとても貴重な時間を過ごせた。私はこの体験を忘れないように時々思い出し、被災したときに活かしたい。

〔私の一枚〕

9月9日に尚絅学院大学と西南学院大学の皆さんとグループワークをした時の写真です。「支援」について話し合い、私たちができることは何かを考えました。皆から溢れ出てくるアイデアの多さに驚き、3日間を通して学んだことをもとに、自分にできることから実践していきたいという気持ちの強さに感動しました。



宮城ボランティアに参加して

国際学部国際学科 1年 荻野雅也

今回宮城ボランティアに参加して感じたことは、偏に津波の威力の大きさ並びに人災の影響の大きさでした。東日本大震災で一番大きな被害を及ぼした事象である津波は、「天災」です。

下の写真は、1日目に訪問した大川小学校です。この小学校は地震発生後に教員側の迅速かつ適当な判断が下されなかった結果、小学生だけで74名もの犠牲者がでた遺構です。この小学校には今まで津波が一度も来たことがなく、地域住民の避難先にも指定されていたので油断がありました。また予備の避難場所が設定されておらず、その点でも災害に対する備えというのが欠如していたのだと感じました。しかしこれらは日頃からの意識があれば如何様にも対処できていた、助かっていたとも感じました。こうして被災した方が数多くいたということを語り部の方々は何度もお話しされていました。大川小学校に限らず、名取市のように他の地域でも同様のことが言えます。



確かに津波をはじめとした様々な天災は予測することが大変難しく、実際に起こってから対処する以上のことは現代ではできません。そこで日頃からの備えがますます重要になると感じました。同様に津波の被害を受けた荒浜小学校では、日頃から避難訓練を地域ぐるみで行っていただけでなく、震災当日は物資を体育館から校舎に移すというとっさの判断により、避難した方々は全員無事でした。一方の大川小学校はこの備えの差により甚大な被害を生み出すこととなりました。

これらの経験は私たちの日頃の生活にも言えることです。津波に限らず台風などの災害全般に備え、念を入れて対策を講じることで減らせる被害は少なくありません。また講じる対策も誤ったものであれば意味を成しません。それを防ぐためにも、経験談や歴史から私たちは学び続けることが重要であると考えます。

〔私の一枚〕

9月8日に訪問した南三陸町の「北の恋人岬」で撮影した一枚です。このような穏やかで牡蠣を養殖している海から、先のような甚大な被害を生む津波が迫ってくるとは到底考えられませんでした。しかし実際にあまたの被害を生み出したということを考えると、「念のため」というものが大切だと感じました。



私たちにできること ～被災地の今～

国際学部国際学科 1年 澤美穂

震災から8年余り。近頃ではメディアなどでは報道されることも少なくなった震災被災地の福島県、宮城県に、震災の記憶と今を知るために足を運んだ。

帰還困難地域の一般道の周りには、手つかずの畑や除染土が積み重なり、重機と作業員の姿しかなかった。古びた店舗には建設業者の看板が取り付けられ、除染作業員の事務所として使われていた。「ここにはごく普通の人々の営みがあった」「住人の方々は今どんな気持ちで過ごしているのか」と考えると心が痛んだ。

70人以上の児童が亡くなった石巻市立大川小学校、校舎の2階まで津波に襲われた仙台市立荒浜小学校を見学させていただいた。震災当時は小学4年生だった私も、とても怖い思いを千葉県で経験したことを思い出した。しかし周りでクラスメイトが津波に飲み込まれ、大好きだった学校が流される恐怖は想像すらできなかった。

行程の中で、多くの被災者の方のお話を聴くことができた。お祖母様とお母様を津波で亡くされた佐藤麻紀さんは私たちに、「津波てんでんこ」という言葉を教えてくださった。この言葉は「津波が来たらそれぞれに逃げなさい」という意味と共に、「自分の命は自分で守りなさい、そうすればもう一度大切な人と会える」という意味があるそうだ。昔から津波被害のあった雄勝町に住む佐藤さんは、その言葉を知っていたが、いざ大きな地震が来てみると、入院しているお祖母様や小学校に通う2人のお子さんの事が頭に浮かび、自分の命を最優先に考えることは出来なかった、と語ってくれた。

私にも大切な家族や愛犬、友だちがいて、もちろん周りの皆にもいるだろう。災害はその全てを、いとも簡単に一瞬で奪い去っていく。変わり果てた大切な人の姿すら、見ることもできないかもしれない。

私はこのように感じたことを活かして、災害についてもっと周り広めて、災害と暮らしが共存できる世の中にしていきたい。同時に、生きたくても生きる事の出来なかった方々のためにも、毎日を大切に生きようと思う。

〔私の一枚〕

福岡県から来ていた西南学院大学の学生と一緒に、関上で被災された長沼俊幸さんのお話を聴かせていただいている写真です。津波は来ないと言われていた関上には、写真の通り古い石碑がありました。そこには過去にあった津波のことが記録されていましたが、先人の思いは届かず、多くの命が亡くなりました。



宮城ボランティアに参加して

国際学部国際学科 1年 松森澄海

今回初めて参加して、感じたことや思ったことが3つある。

1つ目は「自然の恐さ」である。いつどこで何が起きるのかは全く予測できない。仮にできたとしても、それを防ぐことができるのかと聞かれたら断言することはできない。責めようにも責められないのが、自然の恐さだと思った。水の力だけで建物も動植物も人間をも飲み込んでしまう。本当に恐ろしいと思う。

2つ目は「今あるものが当たり前ではない」ということだ。自分の命より大切な家族もそうだし、友だちも携帯も、家も学校も会社も、環境も衣食住も、全て当たり前ではないのだ。今あるものに日々感謝して生きていきたい。

3つ目は「人間のあたたかさ」と強さである。被災した方々のお話を直接聞いて、大切な方を亡くされた方が沢山いるということを実感した。「自分も亡くなられた方のもとへいきたい」と仰られている方もいた。しかし誰もが必死に生きている。自分の周りに起きたことを一人でも多くの方に伝えようとしている。言葉では表せないほど辛い経験をしたはずなのに、そのことを自らの口で、全国の方々に伝えよう、届けようとしている。それを知ったとき、人間はあたたかく、強いと感じた。



事前学習で、私は仙台市立荒浜小学校について調べていた。画面上に出てきた荒浜小学校の校舎内は悲惨なものであった。画面からでも伝わる自然の恐さ。それを自分の目で直接見たときはショックだった。本来なら曲がっていないはずの鉄柵も、机や椅子が置かれているはずの教室も、ベッドがあるはずの保健室も、散らかっていない廊下も、全てが本来ある形ではなかった。屋上へ行ったとき、風が吹いているだけでも肌寒かったのに、震災当時は雪も降っており、極寒の中で避難していたことを想像するだけで心が痛んだ。現地で学ぶ意義の重要性を感じた3日間であった。



〔私の一枚〕

9月7日に訪問した石巻市立大川小学校での写真である。先生が車内で配布してくれた資料で震災前と震災後の写真を見て、言葉を失った。鈴木さんのお話を聞いて、「なぜ」という疑問と後悔でいっぱいになった。全員がパニックになっている状態で何が正解か誰もわからない中でただ時間が過ぎていき、悲しい結果となってしまった。



津波の脅威を知るために

国際学部国際学科 1年 二上陽太

東日本大震災当日、宮城県内の小学校で授業を受けていた。元々地震は多く、今回も大した揺れじゃないと油断していた。しかし今回は違った。揺れの強さも長さも、規模の大きさも今までの非にならないものだった。私の実家は、山のほうにあるため津波の被害はなかった。しかし沿岸部に住む方々は、地震だけでなく津波に被害にもあっていた。私は、津波の脅威や恐ろしさを学ぶために宮城ボランティアに参加した。

津波は人を、車を、家を、そして町を飲み込んだ。テレビでさんざん津波の映像を見て、津波の被害にあった方々の話を聞いた。しかし実際に被災地に訪れ自分の目で、語り部さんの話を直接耳で聞くことで、8年目のことなのに鮮明に思い出すこともでき、画面越しには分からない、津波の被害にあった人しかわからない本物の津波というものが顔をのぞかせたように感じた。特に丹野さんの話は終始涙が止まらなくなるくらいリアルなもので、当時のこと、ご家族のこと、津波に襲われた時のことを細かく教えていただくことができた。



語り部さんが口をそろえて言っていた言葉がある。それは「とにかく逃げる」ということである。「今まで津波が来なかった」「ここまでは来ないだろう」「ここまで来たからもう安心」という油断が、津波の被害を拡大させてしまったと語り部さんたちは口を酸っぱくして言っていた。とにかく逃げるということは、どの災害にも言えることである。私はこの「逃げる」という言葉をみんなに伝え、少しでも被害にあう人を減らしたい、8年前被災した私たちに復興支援として動いてくれた方々へ恩返しできる

よう働きかけていこうと思った。

沿岸部はかなり復興も進んでおり、北の恋人岬など観光でおすすめの名所や、台風15号の影響で訪れることのできなかった場所もある。私は再度訪れるつもりです。皆さんも家族と、友だちと、一度訪れてみてはいかがでしょうか。

〔私の一枚〕

北の恋人岬に行ったときに写真です。この恋人岬には、カップルで訪れて鐘を鳴らすとうまくいく、一人で訪れると近いうちに恋人が現れるという言い伝えがあります。彼女彼氏とうまくいきたい方、出会いを求める方は、是非志津川にあるこの恋人岬に行ってみてください。ついでに、このモアイのカップルと写真を撮り、恋愛成就を祈願してみてもいいのではないでしょうか。



宮城ボランティアに参加して

国際学部国際学科 2年 フイ ティ マイ フーン

東日本大震災から8年半、ボランティアとしては初めて被災地に足を踏み入れました。初日は早起きに加えて移動時間も長く、疲れもありました。しかし麻紀さんという方の話をお聞きして、実際に現地を訪れることで忘れられない体験ができたこと、また実際に災害が起こった時にはどんなことができるかということを考えさせられました。麻紀さんのお話は8年半前のことですが、こんなに時間が経っても涙は出てくる。想像をつかないぐらいの悲しい気持ちだったと思います。何度も地震や津波に襲われた土地に生まれ育ち、その恐ろしさも分かっている方なのに、やはり「震災は本当に怖いんだ」と言っていました。同じようなお話は鈴木典行さんのお話にもありました。津波が引いた後、鈴木さんが小学校の土に埋もれた我娘のご遺体を見つけたことお話には、鈴木さんも私も涙しました。



2日目は丹野さんの話が心に強く残っています。いつか似たようなことが自分や私の家族に起こったらどうするか想像もつきません。災害後、丹野さんは息子さんを亡くされました。しかし彼女は非常に強く、私たちの前に立って話し、何が起こったか、どうすればいいかを教えてくれました。「自分が親より長く生きる」の言葉も忘れません。災害が起きたら、まず自分の命を守り、その後他者に助けることの大切さも知りました。一人ではできることは微力だけれど、力を合わせるによって乗り越えられることがあると学びました。

実は以前は、被災地は危ないところだと思っていました。そして8年も震災から経っているので、道路も家々も元の状態に戻っているだろうと思っていました。

しかしそれは間違えた認識でした。私の一意見としては、復興するためには避難した人々は、名取市を含めた被災地に戻ってきてもいいのではないかと考えました。

参加を決意する前、私は不安でした。参加者の中で唯一の外国人、日本語にも不安がありました。しかし現地の方々も仲間たちも暖かく受け入れてくれて、本当に嬉しかったです。

〔私の一枚〕

丹野さんから、震災当日の写真や動画、恐ろしい経験を聞かせていただきました。今回の活動を通じて、「どこでもどの場合でも、災害が起きたら、まず自分の命を守り、周囲と向き合う」ことを改めて考えさせられました。言葉だけでは伝えきれないこと、伝わらないことを、体でしっかりと受け止めていきたいと思います。



宮城ボランティアに参加して

国際学部こども教育学科 1年 浅井梢

「8年も前の被災地に行って、私たちにできるころはあるのだろうか」。その答えが出ないまま出発をして初めて見た被災地の光景は、福島県富岡町から浪江町の帰還困難区域だった。大きな娯楽施設は復興作業の前線基地に姿を変え、作業用の大きなトラックや作業着を着た人しかいなかったが、その光景からは8年前の福島の日常が見て取れた。「復興」、それはもとにあった場所に同じものが建てなおされ、同じように人々が暮らすことではないと頭では理解していたが、実際に現場を見て痛感した。

宮城での3日間は、今まで考えてこなかったことを考える機会が多かった。現場の方のお話を聞き、癒えない心の痛みや震災当時現場では何が起きていたのかなどの様々な話を聞いて考えるとともに、当時のことや防災の知識の無さに自分自身とても恥ずかしく、情けないと思った。その中で深く考えさせられたのは1日目に訪問した大川小学校だ。当時のことや今の問題についてお話してくださったのは、東日本大震災での津波で娘さんを亡くされた鈴木典行さんだ。



大川小学校では教員・児童合わせて84名が津波で命を落とし、今もなお裁判(*)が行われているそう。地震発生後の津波はないと考え避難が遅れたこと、海までの距離3.7kmと近いのに第3避難場所がなかったこと、でも避難をするのには十分な情報と方法があったという。この話を聞いて、先生になるということとは子どもたちの命を預かることなのだと改めて意味を重く感じた。教員の判断や事前の避難訓練が身になっていなかったことから娘さんを亡くされたのに、教員

を目指している私たちの前で話をしてくださった鈴木さんの心境を考えると自然と涙が出てきて、教員になるということについて考えさせられた。私たちにできることは現地に赴き、話を聞くことだけではない。お話してくださった方々は揃って「伝える」ことの大切さを教えてくれた。夢をかなえ、一人でも多くの人に語り継いでいくことで今回の経験が生きてくると感じた。

(*)10月11日、最高裁判所は宮城県、石巻市の上告を退ける決定を下した。

〔私の一枚〕

これは2日目に長沼さんが案内してくださった、復興作業が進む関上の町です。地震や津波からの復興は良い方向に進んでいると見えているものも、そこには昔から住んでいる人の思い出や話題を無くしてしまうのだと、この写真を見るといろんな声が聞こえてくる気がします。



これから

国際学部こども教育学科 1年 江沢南美

東日本大震災から8年。私は今まで一度も被災地に訪れたことがなかった。震災から時間が立つとテレビで取り上げられることが減り、現状が気になっていた。そんな時宮城ボランティアについて知り、実際に訪れ現状を知りたいと思い参加することを決めた。

実際に参加して、震災当時のこと、復興について沢山のことを知ることができた。そして東日本大震災について自分は全然分かっていなかったことを痛感した。私が語り部の方々の話の中でとても印象に残ったのは佐藤真紀さんがおっしゃっていた「私の話は特別に悲痛、苦しい話ではない。被災した大勢の人たちの中のたった一人分」という言葉だ。とても衝撃だった。私は地震の揺れがとても怖く、その後計画停電などはあったが死を身近に感じることはなかった。被災地では大切な人や、自分の知っている人の死がとても身近で起きていたということを考えたら恐ろしかった。佐藤さんがおっしゃっていた「いつか、必ず、近いうちに」。いつ、どこで災害に合うかはわからない。それは教科も



しれないし、明日かもしれない。災害が来ることはわかっていても、それに備えた準備をできていない人も多いだろう。私はその中の一人だ。その時に備えて家族で話し合いをすることはもちろん、普段から感謝の気持ちを言葉で伝えなければいけないと感じた。私は佐藤さんの話を聞き、大切な人がいることの有り難みをとても感じる事ができた。

語り部の方々は、亡くなった人のこと、この震災のこと、全てを忘れて欲しくないから、そして二度と起きないために沢山のの人に伝え続けなければいけないという使命感があるとおっしゃっていた。私には被災経験はないが、語り部の方々が話してくださったことを大切な人に伝えていきたい。

私にできることは、聞いたことや見たことを忘れないこと、伝え続けること、そして悲しいことだけではなく、牛タンやずんだ餅など美味しいものが沢山ある街でもあることを伝えることだ。

そしてまた訪れたい。

〔私の一枚〕

この写真は、南三陸さんさん商店街のモアイ像の前で撮ったものです。南三陸町には豊かな海の幸など美味しいものが沢山あり、堪能することができて嬉しかったです。宮城ボランティアに参加したことによって、おいしい食べ物にも出会えました。



宮城ボランティアに参加して

国際学部こども教育学科 1年 菅野早紀

震災当時、私は小学4年生でした。今まで体験したことのない大きな揺れと、友だちの泣き声や不安の表情を今でも思い出します。地元は液状化で道路が封鎖され、家が傾いて自分の街が自分の知らない顔になっていくのがとても怖かったです。

今回宮城ボランティアで訪れた仙台市の荒浜地区は、街はなくなってしまいました。道路もなければ家もない、目印となる木もコンビニもない。友だちと遊んだ公園や思い出いっぱいの学校が自分の知っているものじゃなくなってしまう。「ふるさと」と呼びたいのに呼べなくなってしまう現実が、たった8年前にあったのだと思うと胸が痛くなりました。

荒浜小学校は廃校になり、津波の脅威を後世に伝えるために震災遺構として保存されています。教室は震災当時のままで床のタイルが剥がれ、天井の照明は津波の威力を表すような酷い壊れ方でした。壁には津波が到達した線がくっきりと示されていて、津波の恐ろしさを感じました。



今回の宮城ボランティアに参加して、地震だけでなく災害についてもっと勉強したいと思いました。東日本大地震が発生して、沢山の人が心に傷を負ったと思います。また災害が発生した時に同じような悲しい思いをしないように私たちが語り継いでいかなければいけないし、対策すれば助かる命があるということを伝えなければいけません。私たち若者が率先して災害対策や避難の方法を家族などと共有すれば、助かる命があるということを発信できたらと思います。将来私は

小学校の教員を目指しているので、生徒の命を守るためにも今回の経験が無駄にしないような自分の知識にしたいと思いました。

〔私の一枚〕

この写真は、震災遺構・荒浜小学校の1階です。子どもたちの笑顔でいっぱいのはずの学校がこのような場所になってしまったのはとても悲しい現実です。しかし目を背けることなく、語り継いでいかなければいけないと思いました。



宮城ボランティアに参加して

国際学部こども教育学科 1年 土田蒼太

雄勝町で佐藤麻紀さんの話を聞いた。雄勝町では、震災のあった3月11日、町中心部の600世帯が津波に流されたという。多くの方が亡くなり、その中には知り合いの顔も多かったそうだ。佐藤麻紀さんのお話の中で印象に残った言葉が、話の最後に残した「私の話は『貴重な話』ではない」という言葉だ。こう言われる前に、もし私が語り部の方にお礼を述べる代表に選ばれていたら、冒頭に「貴重なお話をありがとうございました」と言っていたに違いないと思う。佐藤麻紀さんは、その理由にこう述べていた。「私の話は、被災した大勢の人たちの中のたった一人分です。特別に悲痛な話や、苦しい話ではないのです。大勢の中のたった一人分の体験談なのです」と。



佐藤麻紀さんは、お母様を東日本大震災の津波で失っています。その人が「特別に悲痛な話、苦しい話ではない」と言うのです。故郷を失い、お母様まで失った人が、その話を貴重な話ではなく、特別に悲痛な話でも苦しい話でもないと言うのです。



私は、「3.11」が悲痛な話を普通の話にしてしまうほど、麻紀さんの生活、麻紀さんの心に影響を与えたのだと知りました。私は、この悲劇を二度と起こさないために今できることを考え、話し合い、伝えることにしました。

最後に麻紀さんは、「地震があったらとにかく逃げろ」と私たちに伝えました。震災当日、逃げる機会はあったのに逃げずに亡くなった人は多くいて、「今回もそこまで大きな津波ではないから大丈夫」と多くの人が口をそろえていたそうです。「逃げて生き延びれば、また会える」と。そしてそれを自分の大切な恋人、家族、友達に伝えてくださいと言っていました。「今回も」と油断せずにすぐに逃げることの大切さを、大切な人に伝えたいと強く思いました。

〔私の一枚〕

この写真は、大川小学校で撮った写真です。この小学校では、大人の適切とは言えない判断で児童74人の命が犠牲になりました。学校の裏側には山があり、そこに逃げたいと叫ぶ生徒もいたそうです。しかしそれを止めたのは教師でした。もう二度とその悲劇を起こしてはいけないという思いが込められた写真です。



宮城ボランティアに参加して

国際学部こども教育学科 1年 藤木羽舞

震災から8年。復興公営住宅が多く建ち並び、仮設住宅の時よりも良い暮らしができて嬉しいだろうな、と綺麗になった閑上の街を見て思っていた。しかし実際に閑上の街で起こっている問題は、仮設住宅で時間をかけて形成されたコミュニティがなくなり孤立し、家から出かけなくなり孤独を感じる方の存在である。「仮設住宅に戻りたい」と感じている方がいらっしゃる、ということだった。

今回の宮城ボランティアに参加して、津波は本当に怖いものだとなった。宮城の人はおばあちゃんやおじいちゃんから、「大きな地震が来たら津波が来るよ」と言われていたそうだし、地震が来たら山に逃げるといことも言われてきていたらしい。しかし来るはずがないと誰も思っていた油断があったため、東日本大震災では被害が大きくなってしまった。宮城の海はリアス式海岸で遠浅なため、地震発生後約30分で津波がきたそうだ。今後関東で起きるとされている地震(東京湾北部地震など)の場合は、30分も待ってられないかもしれない。自分の命とみなの命を守るためには、よく話しておくことが大切だと思った。命さえあれば必ずまた会えるということ、まずは自分の命を守る、「津波てんでんこ」の意味を知った。



また私が励まされ支援をしてもらっている側なのではないか、とも感じた。当時の状況を話すことは簡単なことではない。辛い話のはずなのに、私たちのために、今後のためにと語り続けている語り部さんは本当に強くかっこよかった。私は話を聞くだけで被災経験をされた方々に何もできなかった。だからこそ私はこれから自分の言葉で、今回聞いた話、感じたことを伝えていきたい。



〔私の一枚〕

3日目に行われた、3大学合同の交流会です。「支援」とはなんだろうというテーマでグループに分かれて話し合い、自分の意見を出し合いました。いろいろな人の意見が聞けたこと、また自分とは異なる環境や地域の人との交流が今までなかったため、とても新鮮な経験でした。



宮城ボランティアに参加して

国際学部こども教育学科 1年 前島若菜

被災地の今の状況をなんとなく知ってはいたが、実際にその地を訪れて自分の目で見るのが大切だと考え、被災してから8年経った震災の被災地を初めて訪れた。震災から8年経ち、徐々に震災の痕跡はなくなっているのだが、やはりそれは視覚的なもので、今でも心に傷を負っている人がいることを、お話を伺いながら感じた。

私が印象に残ったお話は、1日目の一番初めに聞いた雄勝町の佐藤さんの話である。初めて宮城ボランティアに参加したため、「話を聞くだけの受け身のボランティア活動なのではないか」と考えていたため、自分がやるべきことがよくわかっていなかった。しかし佐藤さんのお話を聞いているうちに、その気持ちは解消されていった。震災当時のこと、そしてこれからの未来のこと、家族が大切だということなど、佐藤さんはたくさん話をしてくれた。話を聞いて、「悲しい」とか「かわいそう」とかではない、説明することができない感情とともに大粒の涙が頬を伝った。この涙をきっかけに未来で起きるかもしれない災害に向



けた自分たちが生き抜くためのヒントを見つけることを、今回の活動のテーマとして臨むことで活動の位置付けができた。そして、佐藤さんがおっしゃっていた「よく『貴重な話をありがとうございます』と言われるが、全然貴重な話ではない。こんな話は被災地に行けばゴロゴロ転がっている」という言葉から、津波の被害の大きさや怖さを感じ取ることができた。

今回の宮城ボランティアの活動を通して感じたことは、「知る」ということである。何人もの被災者の方からよく聞いた言葉が、「まさかここに津波が来るなんて」である。私も自分の町が災害に合うことを想像したことがないので、もし自分の町が災害にあった時にどこに逃げるのかをきちんと家族と話し合わなければならぬと考えるきっかけにもなった。そして今回の経験をきっかけに、これからたくさんのボランティア活動に積極的に取り組んでいき、少しでも誰かの力になることを今の私の目標にしていくきっかけにもなった。

〔私の一枚〕

1日目に泊まった旅館から撮った、海の写真です。人々を飲み込んだということが信じられないくらい美しい海に心を奪われ、シャッターを押しました。私がお話を聞いた方々は「海が嫌い、憎い」と言っていなかったことが印象に残りました。この景色を見ながら自然を憎むのではなく、どのように向き合っていくのが私たちの自然災害への向き合い方なのだと思います。



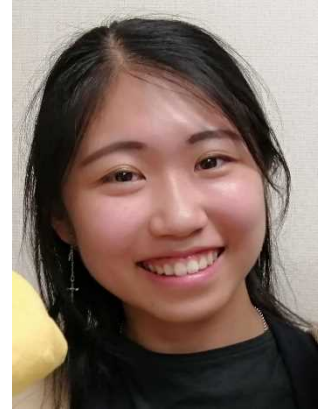
復興とは何なのか

国際学部こども教育学科 1年 村上梨桃

被災地となった福島・宮城を訪れるのは初めてだった。

千葉から北上していき、途中で一旦高速を降りた。震災時の原子力発電所の事故の影響により住むことが許されない、「帰還困難区域」が広がる双葉町。建物は震災の影響で崩れたままのもの、人が住まなくなったことで荒れ果てていた。震災直後から営業をしていない店舗の中には、除染作業の基地になっていた場所も見られた。目には見えない放射線の脅威が、それらに表れていた。

震災遺構として保存されている、仙台市立荒浜小学校に足を運んだ。1階にはひしゃげた柵や壊れた教室、2階にはこの高さまで津波が来たのだとわかるような錆や汚れを目にした。4階に上がると、自分が通っていたような普通の教室があった。しかし時間が止まっているのが感じられた。黒板には「卒業式予行」「ドッジボール対決」など当時の連絡事項も書かれたままであった。屋上に上がり荒浜の街を見たが、人家は全くない。海のほうも防風林の松が数本のこ



っているのが見えるくらい。足元ではかさ上げ工事が行われていた。荒浜の町もまた、災害危険区域といって人が住むことを禁じられた土地になってしまった。

私は復興とは災害前と何ら変わらない、同じ場所に同じ人が暮らしを再開できることだと思っていた。震災から8年。復興は進んでいるという。じゃあ私が見た双葉町の街は何？ 家はボロボロで人の気配もない。私が見た荒浜の街は何？ 家はなんで一つもないの？ 私が復興という言葉の意味をはき違えているのかもしれない。しかしここに確かにいた人たちは、同じ場所での生活はもうできないのだ。他人事から自分事。メディアから得られる情報だけでは、復興が進んでいるというのばかり入ってくるが、実際に足を運ぶと、今まで通りのことは何一つできていないのではないかと思った。まだまだ自分事にはできていないかもしれないけれど、宮城ボランティアに参加して、大きく見方を変えることができたと思う。

〔私の一枚〕

9月8日に訪問した関上での写真です。過去の災害について彫られた石碑と現在の関上の海です。語り部の長沼さんは、「こどもの頃に石碑によじ登って遊んでいたが、どんな意味が込められているかなんて考えたこともなかった」とおっしゃっていました。自分の街にある石碑やお地蔵さんにはどんな意味が込められているのかを確かめてみたいと思いました。



周囲につなぐ、未来につなぐ

国際学部こども教育学科 1年 渡部陸

震災から8年が過ぎ、テレビやインターネットで宮城や福島が取り上げられることは少なくなってしまった。被災地から離れた場所に住む人たちは震災の記憶が薄れ、当たり前の日常を過ごしている。甚大な被害はあったが、震災から8年も経ち、テレビで報道されることも少なくなったのだから、復興はほぼ完了しているのだ、と勘違いしている人が多いのではないだろうか。私自身も被災地の現状がわからず、そのような勘違いをしていた。



福島第一原発に程近い帰還困難区域の様子を見学した際、ここは本当に日本なのかと目を疑った。人の手がつけられなくなったことによって草が生い茂り、建物や道路は静けさの中に佇み、町全体の時間が止まってしまっているようであった。私は町の静けさに吞まれるように息をすることを忘れ、その光景に見入っていた。

その後、語り部さんの話を聞いたり、震災の痕跡の残る場所を見学したり、被災地の現状を見たが、その全てで胸の締め付けられる思いをした。つらい過去に向き合い、当時の状況を伝えてくださる語り部さん



たちの話を聞くと、覚悟しているはずなのに涙を流さずにはいられなかった。2日目に訪れた関上の記憶の丹野祐子さんは言っていた。「一つの話を知っただけで震災をわかった気になってはいけない」と。今回の活動で聞いた話、見た場所は被災者の方や被災地の一部にしか過ぎず、もっと被害の大きかった地域や逆に被害の少なかった地域も存在する。より多くの方のお話を聞いたり、多くの場所を訪れたりすることが、東日本大震災を知り、教訓をこれからに生かすことへとつながる。これから一人でも多くの人に被災地を訪れてほしい。

この活動で学んだことは私の中で永久に生き続けるだろう。しかしそこで終わりにせず、私にできる形で周囲、後世に発信し、広めていきたい。まずは家族と友人に日頃の感謝を伝えよう。

〔私の一枚〕

この写真は2日目に訪れた、南三陸町の高野会館である。震災時、高齢者芸能発表会が行われており、帰宅せずに建物上層階に避難した高齢者の方々は全員助かったそうだ。3階の外壁に設置されている津波到達地点の表記を見ると、津波の恐ろしさをひしひしと感じた。



大きな爪痕

国際学部こども教育学科 2年 水野里緒菜

東日本大震災が起きた当時、私は小学校5年生だった。授業中に教室が大きく揺れ、クラス全員が机の下に潜り込んだ。担任の指示で校舎の外に出たとき、コンクリートは今にも落ちてしまいそうな大きなひびが入っていて、グラウンドに避難しているときに液状化で水があふれ出しているのが目に飛び込んできたとき、今までの地震とは格段になにかが違うことを悟ったのを思い出した。

私は、宮城ボランティアに今回初めて参加した。それと同時に、初めて東北へ訪れた。自ら足を運び被災地にふれるボランティアは初めてだったため少し不安だった。

3日間を終えて私の中で強く残っているのは、宮城県石巻市大川小学校を訪問したことだ。そこでは避難していた娘さんを亡くされた鈴木さんのお話を聞いた。実際にこの場所でなにが起きてしまったのか、なぜ74名もの尊い命が一瞬にして奪われることになってしまったのか、その時に時間が戻ったかのように



お話しされていた。大川小学校のある地域では津波は来ないといわれていて、山に逃げようと主張する先生もいる中、大半の先生たちは「大丈夫、津波は来ない」と言っていたそうだ。児童の何人かは津波が来ることを先生に泣きながら訴えつづけたが、届かなかった。もしもその時児童の叫び声を受け入れることができていたのなら多くの命が助かっていたと思うと、全身硬くなり苦しい気持ちでいっぱいになった。本当にあった事実。しかし私自分が見た風景を知らない人が、

日本にも世界にも大勢いる。

宮城から帰ってくると、台風15号の影響で千葉県が被災地となっていた。家が停電になり、あたりまえが突然になくなることを実感した。いや東日本大震災があったのにもかかわらず、忘れてしまっていたのだ。被災された方の苦しみに立ち向かっているのだから、私たちは全力で向き合い、自分の周りをまきこみながら思いを繋げていくキーパーソンにならないといけない。

〔私の一枚〕

8年たった宮城県石巻市大川小学校の校舎の様子は、津波の恐ろしさをものがたっていた。壁で覆われていたはずの側面は全てなく、中の跡形もなくなってしまった教室が顔をだし、バルコニーのひさしにはむき出しになった金属がいろいろな方向にのびていた。

しかし校舎は、津波の力に負けじとそこに残っていたのである。



「あたりまえ」は奇跡の積み重ね

国際学部こども教育学科 3年 阿部雅樹

2011年3月11日14時46分18秒。一秒前までは当たり前にあった景色、あたりまえにいた家族や友人。その「あたりまえ」があたりまえではなくなった。津波が押し寄せて多くの命が天に昇っていった。「あたりまえ」がなくなるのはどういう意味なのか想像もつかない。正直想像もしたくない。怖い、悲しいなどいろいろな負の感情がひっきりなしに出てくる。今歩いていること、友達と笑っていること、家族にただいまと言えること。それは「あたりまえ」ではなく奇跡の積み重ねで成り立っていることを実感した。



「いってきます」「……」 そのあとの言葉が二度と帰ってこないのが災害。息子を津波で亡くした母の話を聞いた。親孝行とは親より長く生きること、そう教えてくれた。いってきますと家を出て学校に行き二度と帰ってこない。家族が同じ状況になったら立ち直ることはできないと思う。

将来教師になるにあたり、考えることは沢山あった。大川小学校では教師10人、児童74人が犠牲になり、4人が行方不明となっている。教師の指示で裏山に登っていれば、犠牲者は少なくて済んだと言われている。教師の指示で多くの命が天に昇って行った1つの事例である。ただ教師の一言で全校児童が助かった事例もある。事前の防災訓練の大切さを改めて知った。



「津波てんでんこ」という言葉がある。他人にかまわず逃げろなどと誤解されていることが多いが、実際は「他人を置き去りにしてでも逃げよう」ということではなく、あらかじめ互いの行動をきちんと話し合っておくことで、離れ離れになった家族を探したり、とっさの判断に迷ったりして逃げ遅れるのを防ぐのが第一ということである。また生きていれば後で必ず会える。そのような意味がある。

最後に。命の大切さは人間だけでなく、動物、植物も同じだと思う。一つの大切な命であってすべて同じ重さであると実感した。

〔私の一枚〕

大川小学校の校庭で撮った一枚です。ここで多くの命が亡くなってしまったが、また新たな命が元気の育っているのが印象的でした。一輪の花からこどもたちが笑っている顔が浮び、笑い声が聞こえた気がしました。オレンジの花は力強く咲いていて、復興に向かうという気持ちが花からも伝わってきました。



うわべの復興

国際学部こども教育学科 3年 大野直樹

今回の宮城ボランティアを通して、「真の復興とは何か」を考えることが多かった。この活動に参加する前は、復興という言葉に深い意味など存在していないと考えていた。だから実際に宮城に足を運び、被災された方々の話を聞かない限り、復興という言葉の意味を考えることすらしないで今後の人生を歩むことになっていたと思う。今考えれば、それがどれだけ恐ろしく、そして無責任であったかと痛感させられる。

では、私が思う復興についてまとめていく。復興とは「倒壊してしまった建物を再建したり、津波の被害にあった人の手当てをしったりするだけでなく、被災された方々の心の支援まで手を伸ばすこと」だと解釈している。実際に津波に流されていた長沼さんの話の中に、「7年間住んだ仮設住宅を出て、新しい生活を始める人が増えた。しかしそれが果たしてよいことなのだろうか。お年寄り7年かけて一生懸命築き上げた震災後のコミュニティを壊してまで、仮設住宅から出てもらう必要があるのか」という問いかけがあった。その問いかけに耳を



疑った。復興とは、進めば幸せだと安直に考えていたからだ。実際に仮設住宅を出た後で、新しいコミュニティを作ることができず、心の病になってしまう人も少なくはないらしい。私の中で、復興とは単なる再建ではないと思うようになったのはこの時からだ。復興とは、物ではなく人なのだ。人の心を支えることができれば真に復興とは言えないのである。

宮城ボランティアでは、様々な話を聞くことができた。津波で大切な人を失った話、津波で大勢の小学生が亡くなった話、きっと宮城にはもっと辛い体験が沢山ある。その人たちの心が癒えることなどあるのだろうか。私はないと思う。心の癒えぬ復興など復興ではなく、ただの再建である。つまり、復興が終わることなどないのだ。だからこそ人の心にまで意識をし続けていく必要があるのだ。うわべの復興ではなく。

〔私の一枚〕

私の一枚は、「帰還困難区域」の一枚だ。自分の日常からは考えつかないような、見たこともない光景を目の当たりにした。表現が不適切かもしれないが、何かの映画のような世界だと感じてしまった。再建が進んでいるのに、以前と異なるのは、人が住んでいないという事実である。寂しさや皮肉さを感じる1枚であった。



足元の幸せ

国際学部こども教育学科 3年 小川美咲

東日本大震災から8年が経ち、私たちは普段通りの生活を当たり前のよう
に過ごしていた。しかしそれは、当たり前ではなく大きな幸せであることを強く
感じた。

宮城に向かう道中、一旦高速道路を降りて福島県大熊町や双葉町の帰還
困難区域に入った。そこには、手入れのされていないガソリンスタンドや帰る
ことの出来ない民家が多くあった。どこもバリケードで遮られ、活気なくただ佇
んでいるだけだった。故郷に帰ること以前に、車の窓を開けることすら許され
ないこの場所は、私の胸を強く締め付けた。

宮城県の石巻市や仙台市では、津波の被害を受けた地域を目の当たりに
した。訪れた大川小学校や荒浜小学校は、どちらも校舎の2階まで津波が到達していた。渦巻いた水圧
に負け、崩れ落ちた渡り廊下や剥がれ落ちた天井が津波の被害を物語っていた。津波が来る前、小学校
の周囲にはたくさんの民家があったが、言われなければ分からないほど跡形も残っていなかった。「あの

時に自分が大川小学校の教員だったらどのような行
動をしていたらどうか」。そう思いながら語り部さんの話
を聞いていたが、答えは出なかった。津波が来ている
ので高台に避難すべきであると考えがちだが、余震が
続いている中、裏山に登らせるのは倒木や地割れ、土
砂崩れの危険性があるとも考えられた。あの未曾有の
事態を目の前にしたとき、臨機応変という言葉は実は
通用しないのだと感じさせられた。

被災地の全てが当時のまま時間が止まっているとい
うわけではなく、新たな街を整備して再スタートをきった地域も多々見られた。東北は被災地という印象を
持っている人も少なくはないと思うが、訪れた宮城県には元々観光資源に恵まれ、特に海産物は絶品で
あると確信した。一刻も早く復旧し、再度華ある観光地や故郷として生まれ変わることを心から祈り続け、
生まれ変わった姿を見るために再び足を運ぶ使命があると強く感じた。



〔私の一枚〕

荒浜小学校に展示されている、3時55分で止まっ
ている時計。地震が起きた2時46分から1時間9分後に津
波が到達したことが分かる。当時小学6年生の私は、
体感したことのない大地震に怯え泣きじゃくり動けず
にいた。それなのに、小さな足で一步一步階段を登っ
て避難した子供たちと先陣を斬る先生に、強く胸を打
たれた。



初めての宮城で見てきたもの

国際学部こども教育学科 3年 小林颯人

私は今回が宮城ボランティア初参加だった。これまでに宮城に訪れたことはなく、東日本大震災前の光景も写真や映像でしか見たことがなかったため、どのように変化しているのか未知のまま参加した。

まず感想だけ先に述べると、震災直後の写真や映像を見たときは言葉にならなかった。家や車、思い出などが流されてしまい津波が去った後に残ったものはほんのわずかな建物、木そして瓦礫の山だったらしい。

雄勝で佐藤さんのお話を聞いた。雄勝弁で語っていただきその時の様子が自分の頭の中に映像で流れているように感じた。お話を聞いている際に「津波でんでんこ」という言葉を聞いた。意味は「津波が来たら家族や知り合いよりもまず自分の命を優先しろ」という意味だ。また自分の中で鮮明に覚えているのが「生きていれば必ず会える」というものである。そのままの意味なのだが、助けに行っても自分も犠牲になってしまったら元も子もない。まずは自分の命をしっかり守ってから次の行動に移らなくてはならないと学んだ。



私が今回の宮ボラで最も記憶に残っているもの、そして皆さんに訪れてほしい場所は石巻市立大川小学校跡である。大川小学校では東日本大震災で全校児童108人中74人もの幼い命が津波によって奪われた。学校のそばには授業でも使われていた裏山などもあったのに、なぜそこに逃げなかったのか。理由は「津波はこない、校庭にいた方が安全だ」と教師が思い込んでしまったため。今後このような被害が起きないように、日本全国どの学校でも第二、第三の避難場所の見直しをするべきであると考えた。ここでは鈴木さんのお話を聞くことができたが、自分の手で愛娘を土の中から見つけたと聞いた時は、胸の奥が締め付けられ言葉にできない感情になったのを今でも覚えている。

今回初めて宮城に行って本当によかった。見たこと、聞いたこと、感じたことをいろいろな人に話していきたいと思う。

〔私の一枚〕

この写真は閑上地区に整備された震災メモリアル公園にある、「種の慰霊碑」とそこから発芽した「芽生えの塔」です。塔の一番上は津波の高さと同じ高さで作られており、どのくらい大きな津波が襲来したかを物語っています。ここには皇太子ご夫妻（現天皇皇后両陛下）が被災地で詠んだ歌が書いてある石碑があるので、そちらもぜひ見てほしいです。



生きること、伝えること

国際学部こども教育学科 3年 穴倉海

東日本大震災から8年。今回宮城ボランティアという機会をいただき、被災地に訪れた。語り部の方のお話を聴き、実際の場所を自分の目で見て、触れ、本当に多くのことを考えさせられた。生きることの尊さについて改めて考えると同時に、自分の小ささを実感した。

私が今、美味しいものをおなか一杯食べられていること、明日の予定を立て電車の時間を調べていること、当たり前前の日常をなにも疑わずに過ごしていることがどれだけ素晴らしく、有難いことなのか。あると信じて疑わないものが一瞬にして失われてしまったとき、私はどのような行動ができるのか、自分が同じ状況になっていたらどうしていただろうか。自分自身に問いかけ、イメージをしたが、答えはそう簡単には出せなかった。しかし、どの語り部さんもおっしゃっていた「必ず生きる、生きていれば何とかなる」という言葉はその通りだと思う。日々いろいろなことが起こるけれど、「生きている」というだけで大きなチャンスがあり、それだけでも尊いことなのだ。生きているというだけで自分がどれだけ



多くの人に支えられ、恵まれた環境にいるのかということ。今回しっかりと考え直すことができた。素直に「ありがとう」と伝えられる人でありたいと強く感じた。

今回は、訪れる場所や聴いた話によって、大学生の私、親になった時の私、教師になった時の私、自分なりに受け止め方を変え、色んな私の立場で考えた。自分だったらどのように考え、どのような判断ができるのか。自分の判断で多くの命が失われるだけでなく、大切な人、自分の命も守ることができない、そのようなことは絶対に避けたい、避けなければならないことだ。今回の経験を経て、被災地・被災者の方への支援を考えることはもちろん、自分自身についても考えを改めることができた。自分の言葉で「伝える」ということ。このような天災があったこと、感謝の気持ち、自分の想い、なにを「伝える」にしても、簡単なことではない。しかし、とても大切なことだ。言葉にすることで人とつながれたり、自分を見つめなおしたりできると、今回の宮城ボランティアを通して改めて感じた。自分にできることを考えて生きていきたい。

【私の一枚】

これは大川小学校。実際の教室を見ている写真である。ここで当時、自分たちの学校が津波にのまれるのを見ている時、友だちの泣いている声が聞こえてきた時、自分自身が津波に飲み込まれてしまう時、彼らは何を・誰を思っていたのだろう、と一瞬で様々なことを考えました。誰が悪いとは言えない、しかし一つの判断で多くの命が一瞬にして奪われる。忘れてはいけな出来事だと感じた。

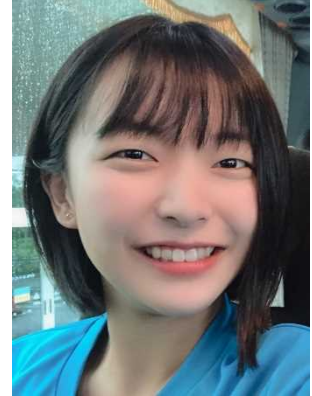


大切な人を守るために

国際学部こども教育学科 3年 鈴木舞花

今回で2回目の参加である。今回の宮城ボランティアには、「大切な人の命を天災から守るために、いま私は何をすべきなのかを学びたい」と思い、参加した。

3日間の中で、多くの語り部の方との再会や出会いがあった。その中でも特に印象に残った語り部の方は、宮城県雄勝町での地震・津波についてご自身の体験を話してくださった、佐藤麻紀さんだ。麻紀さんは、津波によって母親と祖母を亡くされた。地震発生直後、佐藤さんは病院にいらしたろう母親と祖母、学校で避難しているだろうこども、どちらを助けに行くかを迷い、こどもを助けにいくという決断をした。大きな津波が押し寄せ、こどもたちと避難した山の上からは、見えるはずの三階建ての病院は津波によって飲み込まれ見えなくなっていたという。私が佐藤さんと同じ状況になってしまったら、到底受け止めることができないだろう。また私がこのような状況で即座に決断をしなくてはならないときに、すぐに決断を下せるかはとても難しいことだろうとも感じた。



「津波てんでんこ。生きていればまた会うことができる。だから、自分の命をまず守ろう。」この言葉は、今回の宮城ボランティアで出会った全ての語り部の方が言っていた言葉だ。大切な人のことを気に掛けると同時に、住んでいる地域の天災の歴史をきちんと学ぶことや大切な人と避難場所をきちんと共有することで、自分の命や大切な命を守ることができる。実際に南三陸町の戸倉小学校では、津波が来ることを想定し2日前に避難マニュアルを見直したことで、東日本大震災当日は、全ての児童の命を救うことができたという。

大切な人とまた再会するためにも、宮城ボランティアで学んだことをきちんと伝え、日頃から天災が起きたらどこへ避難をするのか、どのような行動をすれば良いのかを共有していきたい。この3日間で学んだことを無駄にせず、いま生きていることに感謝して生活していきたい。

【私の一枚】

ここは仙台市立荒浜小学校である。現在は、震災遺構として残されている。津波に流された家屋や瓦礫とぶつかり、フェンスや窓枠が曲がっている。東日本大震災の津波の威力がよくわかる写真だ。



宮城ボランティアを終えて、今の自分にできること

国際学部こども教育学科 3年 角田友博

今回私は、初めて宮城ボランティアに参加しました。3日間で数々の震災遺構を回ったり、語り部さんたちのお話を聞いたりした。ニュースでは聞いたことのある場所やお話ではあったが、実際に自分の目で見、自分の耳で聞くことで心に響く言葉や街の姿があった。

その中でも私の心に強く残っているのが大川小学校の姿と語り部の鈴木典行さんの話である。大川小学校では東日本大震災による大津波で児童74人と教職員10人がなくなっている。なぜこれだけの犠牲者が出てしまったのか、私は疑問に思っていた。鈴木さんの話を聞いて、私は教師という職業に責任の大きさについて考えさせられた。6年生の児童が言った「山に逃げるべきだ」という意見を、教師の「津波は来ないだろう」という根拠のない予測によって否定し、校庭に待機という指示を継続することになった。結果論ではあるが、学校のすぐ裏には山があり、そこに上って逃げていれば命は助かっていた。教師の指示によって多くの尊い命が失われた。このことは教師を目指している



私にとって、とても考えさせられる話だった。子どもの命を預かる仕事、責任感のある仕事ということは分かっていたがその重みについて認識が甘かったように感じる。命にかかわることは最悪の状況を頭において指示を出さないといけない。また、日頃から最悪の状況を想定した避難訓練や物資の準備をしておくことも必要だと感じた。

自分が実際に聞いてきたことを周りに伝える。それが自分にもできる震災を忘れないためにできることだと思う。関東でも南海トラフ地震が数年後に起こるという予測がされている。海と接する千葉県にも津波が来る可能性は高いと思う。そこで「津波てんでんこ」という言葉を広めていきたい。津波が来たら周りのことよりも自分の命が助かることを第一に考えて逃げる。お互いに生きていればどこかでまた会えるという意味である。命を守ることを第一に考えてもらえるように伝えていきたい。

〔私の一枚〕

9月8日に訪問した荒浜小学校での写真。屋上から撮ったこの場所には、震災前には荒浜の街が広がっていた。津波で家も海岸沿いの防風林もほとんど流されて、前は見えなかった海が今では見えている。震災後、人が住むことのできない災害危険区域に指定されている。震災によって大きく街の姿が変わってしまったことが分かる写真である。



宮城ボランティアを通して

国際学部こども教育学科 3年 仁科沙月

2011年3月11日14時46分18秒。当時小学校6年生であった私は、6日後に卒業式を控え文集を作っていた。学校が揺れた瞬間、何が起きたのか理解できず、ただ机の足を掴むことしかできなかったことを記憶している。今回宮城ボランティアに参加して、東日本大震災後の被災地を初めて訪問した。そこで目にしたのは8年経った復興へ向けて進んでいる被災地の姿であった。

一日目に訪問した石巻市立大川小学校では鈴木典行さんにお話を伺い、地震から津波がくるまでの約50分間に学校で何が起きていたのか知ることができた。結果的に小学校や石巻市の防災意識の低さにより74名の笑顔が奪われてしまったと考えると、とても胸が痛い。学校の裏山の避難場所になるはずであった高台から目にした元校庭には、花の苗で「大川小」という文字が作られていた。その花を見て私は知らないはずの現在、自分と同じような歳の児童たちの姿が思い浮かんできた。この輝きたちを二度と失われないようこの話を伝えていき、考えていきたい。



二日目に訪問した名取市閑上地区では、丹野祐子さんと長沼俊幸さんから、住民の「津波は来ない」という認識、油断で約900名もの命が奪われてしまったという話を伺った。とりわけ「閑上の記憶」で見た閑上の町が津波に飲み込まれていく映像はとても衝撃で言葉もなく、ただ津波の威力を思い知った。

この3日間でどこか他人事に感じていた東日本大震災を知り、しっかりと自分の中で考えることができた。そしてこれから自分は何ができるのかと考え、私なりの答

えを見つけた。

それは、「伝えること」である。

【私の一枚】

荒浜小学校6年1組で撮った1枚です。黒板からは「ありがとう」「がんばれ」など様々な言葉が書かれています。荒浜小学校がとても愛されていたことが伝わってきます。町はなくなってしまったけど荒浜地区の3.11をこれから伝えていく架け橋だと感じました。



復興とは

国際学部こども教育学科 3年 宮野哲平

東日本大震災が起きてから8年目を迎えた今年。私たちから震災の記憶は薄れつつあり、また震災を体験していない子どもたちも多くなってきた。そんな中で東北に訪れ、現場を見て、現物に触れ、現実を知ることのできる宮城ボランティアに参加し、「災害」に対する自分なりの考えをもつとともに、「命の尊さ」を痛感した。私は今回で2度目の宮城ボランティアであった。昨年訪れた地域に訪問した際は、以前とは違った風景をみることができ、新しい街が少しずつつくられていることを感じた。

語り部の方々のお話を伺っていく中で考えたことがある。それは「復興とは何か」ということだ。新しい街並みが顔をだしはじめている一方、仮設住宅から元の家へ帰ることができず、復興公営住宅へ移動しての生活をしている方々もいる。仮設住宅で築いたコミュニティを、復興公営住宅で一から築かなければならないという問題が挙げられる。そういった中で、外観の復興も大切であるが、「心の支援」も大切な復興の一部だと私は考える。「復興」の考え方は一人



ひとり違うだろう。しかしその実現に向けて「行動していくこと」が重要だと私は考える。私ができる活動の一步は今回の活動で知った復興の現実、東日本大震災の記憶をSNSなど通して自分の言葉で発信していくことだと考える。情報を発信し多くの人に現実を知ってもらうとともに、決して他人事ではないということを自分で再認識する活動だろう。

私は将来、小学校教諭を志している。宮城ボランティアの活動で経験したこと、考えたことを踏まえて、学校における防災教育について考えを深めていきたい。

〔私の一枚〕

大川小学校の写真です。渡り廊下は津波によって出来た渦によって津波が来た方向とは逆に捻れ倒れており、津波のすさまじさを物語っています。東日本大震災の記憶、津波の恐ろしさを象徴する遺構と言えるのではないかと思います。



8年たった今、そして希望

国際学部こども教育学科 3年 鎌瀧航平

東日本大震災。多くの大切なもの、そして命が奪われた。私は当時中学1年生で、この地震を経験した。家に帰り、ニュースを見たとき驚いた。家が流され、人が津波に飲み込まれている動画が流れているのを見て、「大変だな」と思った。他人事だった。

そして8年。ふと頭に浮かんだ「3.11」。いま東北ではどうなっているのだろう。そう思い、今回宮城ボランティアの参加を決めた。町はきれいになっているだろう。違っていた。震災が起きてからそのままの建物が左右に並んでいた。屋根がない家、壊れた看板。大きな黒い袋の中には、汚染された土などが入っている。それを見ただけで、胸が痛くなった。

大川小学校に行き、津波の恐ろしさを感じた。津波は校舎の2階まで来た、と語り部の鈴木典行さんは話してくれた。地震が起きた当時、教員は話し合いにより、校庭に児童を集めるという選択に至った。すぐ後ろには、山がある。学校行事でもその裏山を使用していた。しかし裏山に登ることにはならず、結果74

名の児童が死亡した。一瞬の判断が命を左右する。津波の恐ろしさを初めて自分の目で、肌で感じる事ができた。また、鈴木さんは自分の娘をこの津波で亡くしたと話してくれた。自分の大切な人がいなくなったらと考えたら、自分も涙が止まらなくなった。

2日目は「閑上の記憶」を訪れ、丹野祐子さんから話を聞いた。丹野さんは自分の息子をこの震災で亡くされたことを私たちに話してくれた。丹野さんは8年たった今でも、息子が好きだった週刊の漫画雑誌を買っ

ているという。「親ってそういうものなのです」と言っていたのが印象的だった。

私はこの3日間を通し、地震や津波の怖さ、いかに自分が今まで他人事として捉えていたかを実感した。私たちにできること。それはこの事実を伝えることだ。逃げてはいけない。話すのは辛いかもしれない。しかし希望もある。その希望に向かって「自分事」としてこれから行動していきたい。



〔私の一枚〕

この写真は、2日目に訪問した南三陸町の「北の恋人岬」での一枚。佐藤良夫さんが案内してくれました。ここが完成できたのは、多くの方の協力があったのだと話してくれました。私はこの場所がこれからもずっと人々の希望となる場所になってほしいと強く感じました。



3.11を忘れない

国際学部こども教育学科 3年 村山真由

東日本大震災が起きた3月11日、私は当時小学6年生でした。今でも鮮明に覚えている大きな揺れと、テレビで見た津波の映像、毎日のように鳴る緊急地震速報の音。子どもながらに、ただことでは無いということをすぐに理解しました。

大学生になり、被災地を訪れるチャンスがあることを知り、今回宮城ボランティアに参加しました。私がこのボランティアに参加した3日間は想像していた以上にとっても濃い時間でした。中でも印象に残ったのは、語り部の方々のお話です。語られる言葉には悲しみ、後悔、怒り、愛情、希望など様々な感情が含まれていたように思います。私自身も一年半前に、突然大切な人を亡くしました。語り部の方のお話と自分の経験が重なり、自分が経験した辛い過去を人に伝えるということとはとても大変なことなのに、辛い過去の記憶を蘇らせながら伝えてくださったと思うと、とても胸があつくなり涙がこぼれました。



震災から8年。街には目に見える範囲では津波の爪痕や瓦礫などはほとんどありません。津波でえぐれた地面には草木が生え、津波でなくなってしまった街は新しい建物が建ち、8年という歳月を経て復興しつつあるということがわかりました。しかしどれだけ工事が進んでも、震災前の街を完全に取り戻すことは出来ないということもわかりました。その中で「私に出来ることは何か」と考え、たどり着いた答えは、「忘れない」ということです。起きたことから目を背けず、自分にできる支

援を継続して行おうと思います。そして震災に「備える」ということ。備えるものは食料や防災用品だけでなく、心も備える必要があります。いざと言う時、家族で集合場所を決めておいたり、避難場所を予め確認したり、今できることをしておくことが大切だと思いました。

そして、家族や友達がそばにいること、帰る家やふるさがあること、全てに感謝しながら、「今を精一杯生きる」ことをここに誓います。

〔私の一枚〕

9月8日に訪問した南三陸さんさん商店街で撮影した1枚です。このピアノは2013年に鹿児島県の「ストリートピアノでつなぐ祈りのハーモニープロジェクト」事務局から贈呈されたものだそうです。私はこのピアノで高校生の時に伴奏した『花は咲く』を演奏しました。とても良い思い出になりました。



語り部さんの気持ちを受け取って

国際学部こども教育学科 4年 榎本海風

昨年私は宮城に2回足を運び、多くの方々から話を伺ってきた。そして後悔を後悔で終わらせるのではなく、そのことと向き合っただけで私たちに広めようとしていることを強く感じた。だから私は、伺ったお話を広める人になろうと考えた。インスタグラムを通じて広めていこうという目標を持ち、今年は臨んだ。

実際に宮城に足を運んで話を伺うと、悲しい思いだけではないという人、被災された方々の思いを胸に前を向いて繋いでいこうとしている人、実際に被害はあったが助かった人などがおいでになることがわかる。そして誰もが、これから起こる災害のために備え、知識を持ってほしいと語っている。前向きで強い人がとても多いのだ。



震災から8年あまりになるが、復興は道半ばだ。仮設住宅からやっと復興公営住宅等に移り、表面上では安心して人が沢山いるだろう。閉上の慰霊碑にも刻まれた天皇皇后両陛下の詠まれた和歌にもそうあった。しかし7年間も暮らしてできた仮設住宅でのコミュニティは、復興公営住宅等に移ったことでまた作り直しになる。なかには寂しさから病気がちになり、3ヶ月で施設に入られた高齢の方もいたようだ。

油断から愛する人の命を失ったという方、奥様と2人で流される家の屋根で助かったという方、最愛のわが子を弔わなければならなかった方、どの方のお話にも悲しい思いでいっぱいになる。そんな悲しい思いを私たちに話してくださる方々の思いは、大切にしなければならない。自らの悲しい経験を私たちが経験することのないように、私たちに繋げてくれているのだ。

3日間宮城に行き、語り部さんから聞いたことは無駄にしたい。災害について知識を持つだけではなく、住んでいる地域の特徴、災害などが起きたらどうするのかしっかり大切な人と話し合うこと、自分の命は自分で守る。その思いを胸にこれからくる災害にしっかり準備をしていかなければならないと思う。宮城で出会った語り部の方々の思いを無駄にしないようしっかり考えながら、生きていきたいと思う。

【私の一枚】

尚絅学院大学での合同ボランティア研修会の後に、再会した尚絅学院大学の友人と撮った写真です。昨年2回宮城を訪問したときにもお会いした方で、今はインスタグラムで繋がって連絡をとっています。こうした人とのつながりはとても大切なことだと気づきました。



津波の怖さ

国際学部こども教育学科 4年 川崎 航平

2011年3月11日、大きな地震が東日本を襲った。そして震災から8年半たった今でも、生活が元通りになってはいない。東日本大震災がなぜここまでの災害になったのか、それはこの大震災は、地震だけではなく津波や放射能という二次的な災害の影響も大きいからだ。私たちはその中の宮城県に行き、当時災害に遭われた語り部の方からお話を聞き、当時の状況を振り返った。ここで私の中で特に印象深かった2人の語り部の方々から伺ったお話を振り返りたい。

一人目の方は、佐藤麻紀さん。私たちがこの3日間で最初にお話を伺った方である。麻紀さんは震災当時雄勝という町に住んでいたそうだ。雄勝という町の概要からお話は始まり、導入から麻紀さんの話に吸い込まれていった。熱のこもった語り感に感極まって思わず涙を流すところだった。麻紀さんは津波の怖さや残酷さを教えてくださった。そして「津波てんでんこ」という大切な言葉を教えてくださった。「津波てんでんこ」とは、「地震が来たら津波が来る。高く遠くに逃げ、絶対に生きろ」ということだそうだ。「各々が逃げて生き残れば、あとで必ず会えるから。」津波てんでんこという言葉の解釈は人によって多少異なるとは思いますが、私はこの麻紀さんの解釈に非常に感銘を受けた。



二人目の方は、2日目に訪問した「閑上の記憶」の丹野祐子さん。丹野さんも自身の体験談と共に辛い過去を振り返りながら、私たちにお話をしてくださった。丹野さんも津波の怖さを教えてくださったのだが、私が丹野さんの話を聞いて印象深いのは、津波の後の話である。「津波は何も残さない」という言葉に、鳥肌が立った。家も人も、財産もコミュニティも、全てが波に流されてしまったという。

お二人の話を伺いながら、私は日頃から物理的にも精神的にも備えていかなければならない、と感じた。またこのレポートでは津波の恐ろしさだけが際立ってしまったが、地震大国日本では地震そのものの被害も大きいはずである。だから防災の準備は、万人共通で行うべき行動だと思う。

〔私の一枚〕

9月8日に訪問した名取市閑上地区の日和山です。高さは6メートル。かつては漁に出た船の帰りを見守る役目があったそうですが、てっぺんまで津波に飲まれてしまったと聞いて驚愕しました。この写真は日和山に掲示されている、津波直後の日和山です。左上の現在の写真と比べてみてください。



宮城ボランティアに参加して

国際学部こども教育学科 卒業生 田地野凌生

私は現在、千葉県柏市立土南部小学校で教員をしている。昨年の教育実習で防災教育の授業を行ったところ、こどもたちが自ら「東北のために何かできることをしたい」と千羽鶴を折ってくれた。そのこどもたちの思いを私が東北で関わってきた沢山の人に届けたいと考え、参加させてもらうことにした。

今回後輩たちに混じって参加するにあたりテーマとしていたことが、「実際に地震が起きた時に、こどもたちを守れるか」である。現在小学校で子どもたちと一緒に生活する中で実際に地震が起きた時に果たして子どもたちのことを守ることができるのか、一次避難、二次避難、避難所生活などを考えたときに迅速に行動できるのかどうか、正直なところ自信が持てない。在学中は4年間毎年この活動に参加し、防災に関する資格も取ってきた。しかし被災地の学校を訪れるたびに、教員として「正しい選択」ができるのかどうか自信が持てなくなる。いま職場では安全主任として避難訓練や安全計画を立てているが、その訓練がこどもたちにとって有意義なものとなっているのかどうか常々感じている部分である。結局のところ対応できるという自信なんていうものはいつまで経っても得ることはできないし、完璧な対応をすることも難しいだろう。しかしそれは何もなくてもいいというわけではない。「減災」を目指すうえで予測と準備は必要不可欠だ。地震が起きたときどうするのか、何を想定し、何を準備すべきなのか、教員同士、こども同士で考えていくことが大事なのではないだろうか。一人ひとりが危機意識を持って災害に向き合うことが大切だと思う。



仕事の関係で2日間のみの参加であったが、様々な語り部の方と写真を撮らせていただき、多くの写真を持ち帰ってくることができた。今度はこの写真を千羽鶴と共に子どもたちに返し、それを見てまた次の誰かに伝えていく、その繋がりこそが次の世代に生きてくる。教員という仕事をしているからこそ、その繋がりの手助けができると信じ、これからも沢山の人に伝え続けていきたい。

〔私の一枚〕

これは、関上小中学校に移設された慰霊碑である。この慰霊碑には、関上中学校で亡くなった14人の子どもたちの名前が刻まれている。たくさんの思いがつまっているこの慰霊碑に、様々なことを見聞きしてきた私の思いや東北の人に何かしたいと千羽鶴を作り上げた子どもたちの思いなど、たくさんの思いがつまった写真である。



3 大学合同研修・交流プログラム

3日目の9月15日(月)に尚絅学院大学で行った合同研修・交流プログラムでは、昨年度に続き敬愛大学と尚絅学院大学、そして西南学院大学(福岡市)の学生が一堂に会してディスカッションを行いました。

本プログラムでは、まず3大学の学生たちが日頃の自分たちの取組や今回の宮城訪問で経験し感じたことを全体に発表して共有しました。続いて尚絅学院大学の佐々木真理先生(連携交流課長)から「閑上まちびらきについて」、西南学院大学の山口由美子先生(キリスト教活動支援課長)から「熊本地震・九州豪雨に



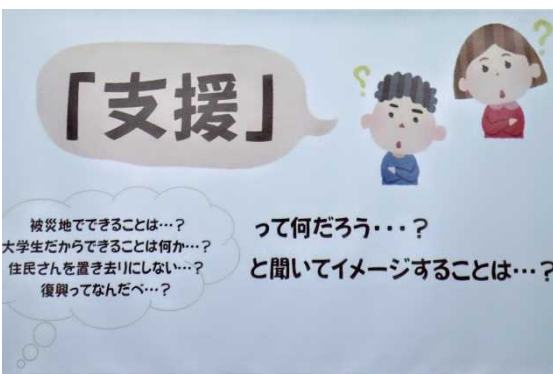
ついて」の講話があり、各地で災害から復旧復興していく様子を学びました。

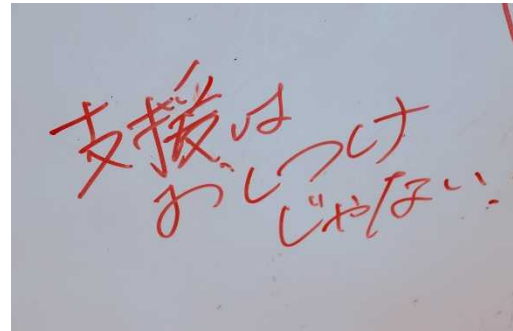
途中でグループごとに昼食を挟みながら、合同ディスカッションを実施。今年は、「支援ってなんだろう」をテーマに、グループ内で話し合ったことを付箋に書きだし、意見の共有を図りました。

当日朝に台風15号が首都圏を直撃していたことから、早めに千葉へ戻る必要があったため、ディスカッションの内容を全体で共有し合う時間をとることができません

でした。しかし短時間ながら、3大学の学生がそれぞれの経験に基づく考えを分かち合えたことは、貴重な成果だったと考えます。

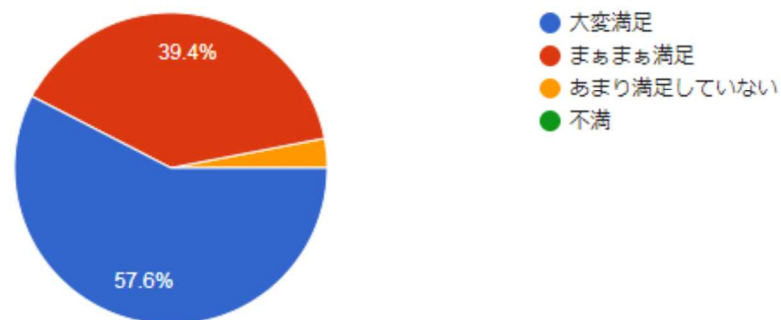
このページでは、当日の様子を写真とフィードバック資料で振り返ります。





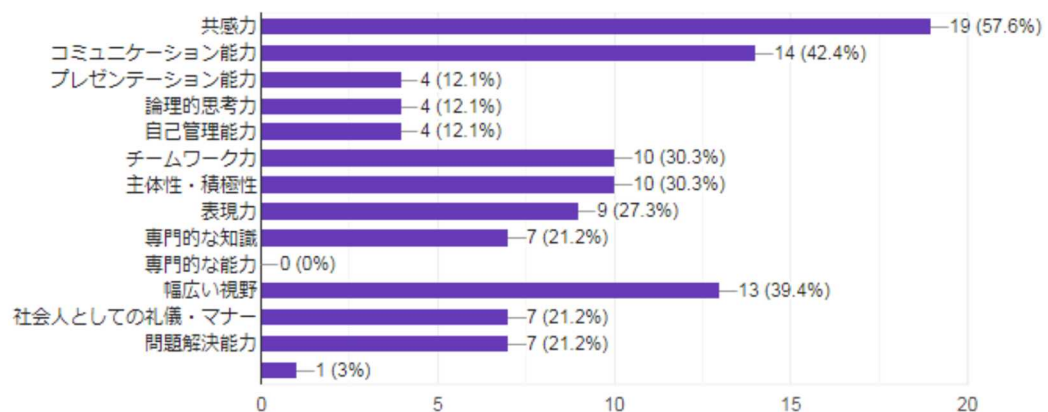
プログラムについての満足度について、1つ選んでください。

33 件の回答



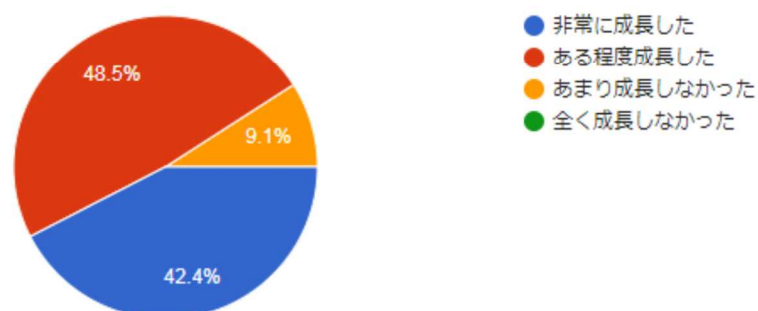
本日のプログラムに参加したことでどのような能力・態度・スキルが身についたと感じていますか？(複数回答可)

33 件の回答



本日の活動でどのくらい成長したと感じていますか？1つ選んでください。

33 件の回答



【今後「活動したい」「学びたい」「経験したい」と感じたことがあれば、それはどのようなことか教えてください。】

- ・九州の災害について
- ・震災後に色々考えることは自分にもしやすいこと。さらに一步進むためには、タイムリーに活動できるような人になりたい、と学びから考えました。
- ・宮城、福島復興活動に携わっていきたいと考えています
- ・テレビでみる映像と、実際の目でみる現実とはやはり違いました。テレビで見た時は、こんなに悲惨だと思いませんでした。なので、被災者の方も仰っていたのですが、伝えていくことが出来たらいいなと思います。
- ・伝え続ける
- ・災害現場にすぐに動ける行動力を持ちたいと思った
- ・風評被害問題
- ・僕らにできる具体的な支援をしていきたい。
- ・次は、話を聞くだけでなく 草むしりでも 小さな事でも復興のお手伝いがしたい。
- ・防災意識を徹底したい。
- ・この3日間を経たその後こそが大事だと思ったので、今後も積極的にボランティアに参加します。
- ・活動面ではSNSで発信、学びたいことは今後どうしていくか、経験したいことは全てを知ったわけではないので、知れることは全て
- ・地震だけではなく、後世に伝えていかなければいけないことが私たちにはたくさんあるのでそのための情報収集をしたいとおもった。
- ・地震と津波だけでなく自然災害で被害にあった熊本などのことも調べて、現地の方のお話を聞きたいと思いました。
- ・もう一度現地に行く機会を作りたい。現地で見たことをもとに自分ができていることを考えて、実践したい。
- ・語りを聞くことも自分にとって貴重な体験の一つですが、聞くだけでなく体で、手で、震災の恐ろしさ、復興の支援を試みたい。
- ・できれば、宮城県以外の被災地域の方と関わってみたい。
- ・すぐに自分が活動できることは、家族や友達に 3日間で学んだことを話すことだと思う。震災から8年経っているけれど、最近仮設住宅が出られた、まだ仮設住宅にいるという方が多くいて驚いた。もっと震災について調べていきたい。
- ・今後は今回学んだことを周りの友人や家族にも自分の言葉で伝えていき、また機会があればこのようなボランティアに参加し、また、個人としても宮城に足を運んでみたいと思います。
- ・震災後に色々考えることは自分にもしやすいこと。さらに一步進むためには、タイムリーに活動できるような人になりたい、と学びから考えました。
- ・被災した地域の復旧の手伝いをしたい。千葉の台風のボランティアなど、今人手が必要な地域で活動が行えたらよいなと考えている

※このアンケート集計は、尚絅学院大学連携交流課の皆様にご協力いただいたものの一部を、抜粋したものです。

(参加学生)

経済学部	1年	五十嵐 優希 中村 幸太郎	永井 郁人
経済学部経営学科	2年	猪又 唯衣	長谷川 風沙
	3年	鈴木 輝久	
経済学部経済学科	3年	伊藤 麻衣 二瓶 幸	江澤 健太 丸野 美紅
国際学部国際学科	1年	荻野 雅也 松森 澄海	澤 美穂 二上 陽太
	3年	フィ ティ マイ フーン	
国際学部こども教育学科	1年	浅井 梢 菅野 早紀 藤木 羽舞 村上 梨桃	江沢 南美 土田 蒼太 前島 若菜 渡部 陸
	2年	水野 里緒菜	
	3年	阿部 雅樹 小川 美咲 穴倉 海 角田 友博 宮野 哲平 村山 真由	大野 直樹 小林 颯人 鈴木 舞花 仁科 沙月 鎌瀧 航平
	4年	榎本 海風	川崎 航平
	卒業生	田地野 凌生	

(引率)

地域連携センター 室長	藤森 孝幸
-------------	-------

編集後記

数年前に「地域防災インストラクター」という資格を取得した。この資格は防災士同様、平時には災害への備えの指導助言にあたり、発災時には避難所などの運営支援をする専門知識を有することが求められる民間資格である。あわせて昨年は「応急手当普及員」（救命講習の指導者資格）も取得したため、今年からは生涯学習センターで「心肺蘇生法」や「家庭の防災」といった講座を担当するようになった。最近では地域の防災講座や避難所運営訓練でもお話しする機会が増えてきたが、必ずお伝えするのは、「避難所は助けてもらう場所ではなく、一緒に助け合う場所だ」「災害時は誰かが助けてくれるのではなく、助け合うのだ」ということ。「他人ごとにはせず自分ごとにする」という声かけを実践することが大切なのだ。

東北の大地震から9年目の宮ボラ。今年は千葉に帰ってきたら自分の住む街や友人・親戚の住む街が台風で被災し、停電をはじめとするライフラインの断絶という厳しい現実をみた学生も多かった。困っている時には、たとえ時間がかかってもお互いに助け合うことで乗り越えるしかない。そして乗り越えながら、人の温かさや縁の大切さを学ぶのだ。

10年目となる来年度は、東京オリンピック・パラリンピックの時期と重なるため、夏休みではなく後期末の2月～3月上旬の開催を検討している。例年より時期が遅くなるが、学生たちの「現地で学ぼう」という意欲をしっかりと支えられるよう、準備を進めたい。

今回の活動で参加者一人ひとりに、東日本大震災がなければ知り合うこともなかった東北の方々とできた「縁」。その貴重な縁が、いつまでも広がっていきますように。

(敬愛大学地域連携センター 室長 藤森孝幸)

敬愛大学 宮城ボランティア2019 活動報告書 ～ いま、ここ、じぶん ～

令和元年11月1日 第1刷発行

発行者 藤森孝幸

発行所 敬愛大学地域連携センター

〒263-8588 千葉県千葉市稲毛区穴川1-5-21

電話 043-251-6364(直) ファックス 043-284-2376(直)

印刷所 株式会社裕星グループ



3大学合同ボランティア学習会で、尚絅学院大学、西南学院大学と交換した各県のご当地キャラクターたち。
今年は各大学の所在する県で活躍するスポーツチームのキャラクターが揃いました。
左からマーくん(敬愛大学/千葉県)、クラッチ(尚絅学院大学/宮城県)、ハリー(西南学院大学/福岡県)。